

## 名前についての多文化間関係学—東アジアの姓, 英語名, 関係名

Cross-Cultural Contacts and Name Usage—Surname, English name,  
Addressing based on Relationship in East Asia

中 村 俊 哉

Shun-ya Nakamura Fukuoka University of Education

福岡教育大学 教育学部 心理科

(1997年9月10日受理)

Key words: English name, Addressing based on relationship, Change of surname, Pronunciation of name, Ethnic identity

This study tried to find the cultural background of Surnames, English names, and Addressing based on relationship in East Asia.

There are many people who don't have a surname, use their father's name, or have an original surname. It is important to understand the structure and usage of names in East Asia.

I interviewed people from Hong Kong and Singapore about their English names, which are a result of contact with western culture. There are some psychological purposes in using English names, for example, having a non-hierarchical friendly relationship, or for experiencing another world.

There are many phenomena involving changing names or changing pronunciation in the host country which I discussed. These are the outcome of cultural ethnic contacts, or assimilation. I distinguished 3 types of changing pronunciation, 1) Keeping Foreign Pronunciation (e. g. Singapore, Korea), 2) Changing to Dominant Society's Pronunciation (e. g. Taiwan), 3) Changing to Regional Pronunciation (e. g. Hong Kong).

In East Asia, there existed a taboo of using the real name therefore they used a separate "nickname" (child name, popular name, Azana=alias), and addressing based on relationship, i. e. A's mother, B Manager, or C's husband.

I discussed the psychological meaning of changing of names throughout life, using Azana or English name, and addressing based on relationship.

Finally I showed some interviews of inter-marriage, where name changing and religion changing sometimes occur. I discussed about multi-cultural and ethnic contacts and their outcome.

### 問題

日本と諸外国の交流が盛んになるにしたがって, 外国人の名前に関係する新しい体験も多くなってきた。島村 (1971, 1977), 松本・大岩川 (1994) は, さまざまな国, 文化における名前の構造について研究した。平ほか (1995) は, 在日韓国・朝鮮人の方の名前の使い方について注目し, そのシフトについて研究をした。しかし, 名前というものの構造の多様性を, 多くの日本人はあまり意識してこなかったのではないか。日本のなかでも, 最近では, 夫婦別姓が話題になっているほか, 一

部には複合姓を用いる人も出てきたものの, 名前の名乗り方の歴史的, 心理学的な文脈は, 必ずしも総合的にとらえられてきたとは言えない。

筆者は, これまで, 香港, シンガポールなど, 多文化が混在し, 接触している地域に関心を持ってきた。そして, 名前に関しては, 香港人, シンガポール華人が英語名 (English name) を使うことに注目してきた。英語名は, 東洋と西洋の文化の接触をよく示している。名前というのは, 文化接触の結果を示す指標のようなものである。多文化混合地域や, 異文化間結婚を研究することは,

文化と文化が接触するときの現象について、意味のある知見をもたらすであろう。

名前の現象の多くは、エスニックな問題をはらんでいると考えられる。例えば、外国に行くと、名前の発音はそのままでは読まれず、その国に合った発音をされることがある。また、移民などにおいては、現地姓名をもったり、改姓をしたりする場合がある。英語名、現地姓名、改姓などの現象は、移住や植民地体験にともなうことが多いが、これらはエスニックアイデンティティやプライド、文化のぶつかりあいや融合と関係していると思われる。

筆者は、本稿では、これらの名前についてのいくつかの現象について検討してゆきたい。この際に、筆者は解釈学的な手法をとる。ある現象が、ある文化の意味の網目の中で、どのような意味を持つのかということは、質的な研究によってしか解明することが出来ない。文化人類学者ギアツ(1973)は「エスノグラフィーとは厚い記述(thick description)をすることである」という。それは、参与観察し、資料、データを収集し、ある状況に含まれる、異なった解釈の脈絡を区別し、意味の構造を選り分けることである。そしてこうした学問の目的は、人間の対話の世界の拡大にある。文化現象の研究にとっては、エスノグラフィーやインタビューを主体とする質的な研究が、なによりも必要となっている。本研究も、対話の世界の拡大を目的とし、名前についての多文化間関係学を試みるものである。

## 方法

最初に、名前および呼びかけに関するさまざまな現象を15ほど示した。その中でも、主に、英語名、現地姓、発音の保存、呼びかけ名のテーマに対して、インタビュー法を用いて、実態を明らかにし、その意味の文脈を検討した。また、文献資料と、データを合間に挿入した。

インタビューは、多くの場合許可を得て録音し、逐語記録を引用するようにした。逐語記録には、筆者の質問や、表現の微妙な具合が現れるため、研究者自身の恣意的な解釈を防ぐことが出来るからである。それができない場合は、要約とした。

なお、本論文では、「姓」という用語を代表して使うが、姓、氏、名字(苗字)の用法には、歴史的変遷があり、区別して用いる。ここでは「姓」はこれらすべてを含むものとして用いることにする。

## 名前の現象の分類

- I 姓・名の多様さ
  - 1 姓のない文化
  - 2 父の名による姓
  - 3 個人の姓
  - 4 複合姓・姓名の順
  - 5 香港・シンガポールの複合姓・冠姓
- II 英語名
  - 6 英語名
- III 現地姓と発音
  - 7 現地姓、改姓
  - 8 姓名の発音の保存
- IV 関係名・俗名
  - 9 関係で呼びかける現象
- 10 階層名
  - 11 阿をつける呼び方
  - 12 字の心理的意味
- V 文化混合
  - 13 名前の文脈
  - 14 夫婦別姓
  - 15 異文化間結婚

## 間に挿入する文献資料・データ

- I
  - 資料1 姓氏の歴史
  - 資料2 中国の女性の姓名の歴史
- II
  - データ1 東アジアの英語名使用
- III
  - 資料3 現地姓、改姓、創姓
- IV
  - 資料4 実名秘守と幼名
  - 資料5 字(あざな)
  - 資料6 名前の一本化
- V
  - 資料7 夫婦別姓の歴史

## 本論

- I 姓・名の多様さ
  - 1 姓のない文化

姓のない文化が広く存在していることは、日本では一般には知られていないため、名前の一部や、父の名前を姓と間違えるといった現象が広範に存在している。アジアからの留学生の中では、姓を持たない留学生が多くいるにも関わらず、多くの日本人は、その一部を姓として捉えようとする。

姓のない名前は、ミャンマー（ビルマ）からの留学生に典型的である。島村（1971）は、ラオス、カンボジア、タイでは、名だけで姓を持たなかったが、政府がこの半世紀の間に、国民のあいだに創姓登録の普及運動を押し進めたとする。しかし、ビルマ、マレーシア、インドネシア3国の大部分は、現在も多くは姓がなく名だけであるという。

彼は、ビルマが姓を設けないことについては、全国的に、独立を尊び、自由に行動する民族精神があること、宇宙すべてが独自の存在価値を持つという仏教思想によるとする。多くは、1語から4語にわたる名前を持ち、一定していないという。

筆者の経験では、ミャンマーからの留学生の多くは、3語の名前をもっていた。ある人は、名前の最後の部分で呼ばれていたが、筆者が確認すると、3語全体で名前であり、続けて言うものであるという。

ちなみに、筆者の経験では、3文字の名前の、最後を愛称として呼ぶのは、ベトナム文化においてである。例えば、ファン・ヴァンドン（FAN Van Duong）の「ヴァン」は、漢字では「文」であり、男性に付ける名前である。したがって、ドンが重要な名前の部分である。また、中国南部でも、名前の最後の部分に、阿や依をつけて、愛称とする。この事については、のちにふれたい。

## 2 父の名による姓

父の名前を付ける文化も広範に存在する。名前だけを用いてきた国の中で、世界的な基準に従うために、父の名前あるいはその一部を付するようになっている場合がある（マレーシアなど）。吉田（1988）は、部族名、氏族名を連称する制度は、特定の世界でしか発生せず、Aの息子のBのように、父祖の名を添えることは、イスラム圏のほか、古代ギリシャ、旧約聖書の世界に見られるとする。

マレーシアでは、最初に名前が1から3語、次に、息子を意味する Bin か、娘を意味する Binti または Bente、最後に、父の名が1から3語で書かれる。

島村の例によると、Mohammed Ali Bin Ahmad（アハマッドの息子モハメッドアリ）、Halima Binti Abu Bakar（アブバカルの娘、ハリマ）などがある。

アトランタオリンピックのマラソンの金メダリスト、エチオピアのファツマ・ロバは、ファツマが名前、ロバが父の名前である。しかし、西洋や

日本では、父の名前を姓とみなしてロバと呼んでいる。多くの人は、自分の名前と呼ばれないで、父の名前で呼ばれてしまうことに多少の不満を持っているという。

田中（1996）によると、モンゴルの留学生は、父親または母親の名を上につける。モンゴルでは、バトバヤルという名前が人気があるが、社会民主党のバトバヤルは、バトエルデニーン・バトバヤルで、前半のバトエルデニーンが、父の名である。大相撲の旭鷲山も、バトバヤルというが、彼は父の名をつけていないようである。ちなみに、父の名は、ダバーである。

## 3 個人の姓

家とは関係なく、一代の姓を付ける場合がある。あるバングラディシュの留学生 Md・A・I さんは、Md. は宗教をあらわす名、A は名前、I は個人の姓である。我々はAさんと呼んでいる。彼の兄はM・Rさんであり、姓はIとは異なり、父の名前でもない。彼によると、昔は、一部の人は姓をもっていたが、地主であったことや、アラブから逃げてきたということが名前で分かってしまうので、使われなくなってきたという。S・Pさんという女性がM・A・Iさんと結婚すると、ミセスS・Iとなる。この点で、確かに姓の役割をなしている。しかし子どもには、全く別の姓名を名付ける。たとえば、M・A・Iさんの子どもは、G・Sさんだったりする。

ちなみに、ヒンズーの人は、カーストや宗教をあらわす名前を用いているという。S・S・K・Bさんの最初のSは宗教を、Bはカーストを示す。S・G・TさんはTが宗教を示す部分である。

姓を持たない（いわゆるファミリーネームを持たない）名前があることを、また、そのような名前が、もともと多くの文化で使われていたこと、現在も広がっていることを理解し、姓を持たない文化を尊重し、名前で呼ぶという態度を持つことが必要である。姓は、多くの場合エスニシティや血縁をあらわし、さらに、カーストをも表してきた。

## 資料1 姓氏の歴史

### 1) 中国

王によると、モルガンは、姓とは、血筋を表し、古代中国では、動物、植物などに関連し、トーテムイズムが起源であるとした。

氏は、姓よりあとに生まれた。周代に、各支系

をあらわすために国名、地名、官名、祖父の字（あざな）などから氏というものが命氏された。このように、姓と氏とは、最初は別のものとしてあり、両方を意識できていた。当時、女性は、姓を名乗り、男性は氏の方を名乗った。男性は、自分の姓とは異なる姓を持つ女性と結婚した。

春秋戦国時代、これらが混乱し、姓と氏が区別できなくなっていった。秦漢以来、すでに姓氏において、高低貴賤の観念は存在しなくなった。ただし、門閥の現象は存在し、それぞれの時代に、有力な姓氏が存在した。

## 2) ヨーロッパ

吉田によると、古代中国と、古代ローマ帝国に、氏（姓）と個人名とをつづけて称することの源がある。島村によると、ナポレオン時代の欧州で、一般市民にも姓が一般化した。フランス人は、1804年のナポレオン法典によって、必ず氏を持つこととなった。ローマ帝国以前の哲学者、ソクラテス、プラトンなどは、父称を付けていたという（tou ソプロニスコス、tou アリストンなど）。

## 3) 日本

日本においては、姓の初見は、421年の倭讃（宋書）である。当時の大王は、倭を姓として名乗るが、倭武（ワカタケル）を最後に、これを用いなくなっている。当時の名前は、ワカタケルのほか、オワケ、オホヒコなどが見られる。平安期、814年の新撰姓氏録は、当時の1182氏を、神別（神裔とする氏族）、皇別（天皇系の氏族）、諸蕃（渡来系の人々）の3つに分けている。

日本でも、姓と氏は区別されていた。井戸田（1986）によると、古代においては、橘宿禰諸兄のように、氏・姓（かばね）・実名の順に記されるのが一般であった。氏は、平安中期から、源、平、藤、橘の4氏にまとまっていった。吉田によると、平安期に、地方豪族が勝手に姓を変える例が現れ、拡散していった。また、土地の名前、地形の名前など、私的な名字が重視されるようになった。日本で現在使われている姓は、歴史的には名字（苗字）といえよう。名字は、起源としては、字から発達した。例えば、文忌寸（ふみのいみき）は、上田三郎という字をもっていた。字は、父子、兄弟で称を異にしていた。こうして、同じ源氏でも、三浦、和田などの異なった名字が生まれている。

明治維新の波を受けて、明治政府はすべての国民に創姓登録させた。これについては、のちに述べたい。

## 4 複合姓・姓名の順

複数の名前、姓をもっている場合、どれが姓で、どれが名かが分からなくなる場合が多々あり、呼びかけるときに躊躇する。複合姓は、南欧、南米からの留学生、フィリピンからの留学生に見られる。アメリカやオーストラリアの学生は、セカンドネームは、姓ではなく、名前であることが多い。例えば、アメリカの留学生M・A・Pさんは、生まれたときから、Aというセカンドネームを持っている。

フィリピンの留学生J・R・Aさんによると、Jが父の姓、Rが自分の名、Aが母の姓、という順番である。日常的に呼ばれるのは名前のRである。

メキシコの留学生H・P・J・Lさんによると、Hが父の姓、Pが母の姓、J・Lは自分の名（二つ）という順番である。日常的に呼ばれるのは最初の名前のJである。彼の子どもは、H・C・L・Mで、Hは父Jさんの父姓、Cは母の姓であり、名前はやはり2語L・Mであり、Lちゃんと呼ばれる。

このように、名前の部分が、2番目に来る場合と、3番目に来る場合がある。父方の姓がある場合は、最初か最後の位置に来ることが多い。多くの日本の大学では、氏名欄を分けて記載させるが、この形式では、名前の順番がバラバラになってしまう。もし、覧を分けて書かせ、名簿などに姓を先に書く場合は、姓と名の間に、必ずカンマを入れることが必要である。アメリカの留学生M・A・Pさんの例では、P、M・Aは正しいが、P・M・Aと誤記されることがしばしばみられる。その国で普通に用いている順番で名前を書かせ、姓がある時は下線を引かせるなどの工夫が必要である。

姓名の順序については、東アジアでは姓・名の順であるが、日本人は、ローマ字記載の時に、名・姓の順に変えて記すことが目立つ（島村）。一方で、母国で名・姓の順で記してきた留学生が、日本において、姓・名の順で自己紹介することがしばしばある。それは、日本の習慣に合わせているのである。

なお、日本において、女性研究者の中で、結婚後の執筆名で、複合姓を選んで人が少数見られるようになった。この場合、中間姓を夫の姓とし、カッコづけていることが多い（武藤ほか1996）。

## 5 香港・シンガポールにおける複合姓・冠姓

中国人にも、複合姓がある。筆者は、香港人の女性に、複合姓が一般的であることに注目していた。例えば、アンソン・チャン行政長官（現次官）は、中国名は陳方安生で、実家の姓である「方」（ファン）を中間姓としている。アジア地域を見渡すと、欧州文化の影響下にあるところでは、夫の姓を名乗ることが多い。英語では、夫の姓を名乗り、中国語では、実家の姓を名乗るという人もいる。一方で、中国名では夫の姓を名乗っていて、英語名で、実家の姓を名乗っている人もおり、人によって異なるようである。姓の文化接触の先進地である香港の現象を参考にしたい。

### 例1 ミセス・チャンは夫の姓・香港人

（行政長官の陳方安生はチャンフォン・オンソンというのが普通で、英語では、アンソン・チャンが普通ですよ）ええ。（ミセス・チャンと言いますか）いいえ。（香港では、マダム・ファンとは言いますか）いいえ。普通言いません。一般ではありません。（陳太とは言いますか）ええ、ミセス・チャンのことです。陳太はチャンタイと読みます。（原文英語）

ある在シンガポール日本人によると、シンガポールでは、結婚した女性が夫の姓を名乗る場合にはミセス、生来の姓を名乗る場合にはマダムをつけて区別しているという。

香港では、マダムはポピュラーではないようである。香港では、英語と広東語で、使い分けているほか、複合姓、冠姓をつけるという「文化融合」を選択しているといえよう。

ある在日タイ人によると、タイでは、日本と同じく、夫の姓を名乗っていたが、最近では、日本以上に別姓を名乗ることが多くなっているという。

台湾から来ているある研究者は、彼女自身かつて複合姓で4つの漢字で名乗っていたが、現在では実家の姓のみで名乗っている。彼女に聞いたところ、家に対する伝統意識が関係しており、夫の家が名家の場合、夫の姓を入れる場合があるが、現在では少ないという。

ある台湾の留学生は、60歳代までは複合姓（4文字の姓名）は多いが、50歳代より下では少ないという。

あるシンガポール華人によると、複合姓による4文字の姓名は最近、流行しているという（例29）。その場合、やはり夫の姓を最初に持ってくる。

次に掲げる資料2は、中国の女性の姓名の歴史についてである。これによると、④が現在の香港

で主流の名前の名乗り方である。つまり、香港の名乗り方は、1930年代の、中華民国の名乗り方であった。私の「4文字の複合姓名は西欧の影響による文化接触の結果である」という仮説は、中華民国成立当時において言えるのかも知れない。

## 資料2 中国の女性の姓名の歴史

島村（P24）によると、清朝の時代は、女性は結婚すれば無姓無名の存在になり、「某家の奥さん」「誰某の妻」「誰某の母」などと呼ばれていた。

強いて名乗る必要があるときは、①のように夫の姓名に妻という字を添え、さらに実家の姓に氏を添えるか、②のようにしたという。

①王竜妻張氏

②王張氏（王家に嫁入りした張家の娘）

中華民国成立後は、実家の姓に氏の字を添え、婚前の名を記載し、さらに婚家の姓をかぶせる③があらわれ、1930年代には、④のように氏を省略する様式が急増した。

③陳劉氏秀娟（陳家に嫁入りした劉家の秀娟）

④陳劉秀娟

当時も、夫婦間の特約によって、⑤のごとく、婚前の旧姓を保持することも認められていた。

⑤宋靄齡（長姉 孔祥熙夫人）

宋慶齡（次姉 孫文夫人）

宋美齡（妹 蒋介石夫人）

中華人民共和国においては、1950年の婚姻法によって、夫婦は独立した人格者であり、それぞれ自分の姓名を使用する権利を持つと規定されている。つまり、どちらの姓を名乗っても良いし、冠姓も法的に認められている。しかし、冠姓はほとんど見られないとのことである。

## II 英語名

### 6 英語名

香港、シンガポールでは、多くの華人が英語式の名前（English name）を持っている。アンディ・ラウ、トニー・レオン、レスリー・チャン、アニタ・ユン、ディック・リーなど、日本でもよく知られている。しかし、これらの英語名の文化的な背景や、意味については、余り知られていない。

当地では、英語誌では英語名が使われるが、中国誌では、漢字が使われることが多い。日本には、なぜか、そのうちの英語名だけが入ってくる。ちなみに、西洋人の名前も、当地の中国誌では漢字で書かれることが多い。アメリカの大統領（美国

總統)のクリントンは克林頓、最後の香港総督のパッチェンは彭定康である。このように、使う言葉により、名前を使い分けるといふ現象があることは、例9で再び示したい。

英語名は高校生や大学生になってから、自分で付けるか、友人に付けてもらうという。英語の先生が付けるという例もある。キリスト教徒は、クリスチャンネームが正式に付けられる。

以下に、香港人へのインタビュー記録を掲げたい。

## 例2 英語名と正式名・香港人

(日本留学の時に、中国人の人たちになんて言いました?) その時に日本にいますので、やっぱり、マージー [英語名] とか、F [姓の広東読み] とかと紹介しすけど (こっちが言ったとおりに呼んでくれるわけね) だから、みんな、中国人でも日本語で話しかけてくれましたけど。だから、マージーともしすとか。(自分は、マージーですと紹介する場面と、F・IW [姓名の広東読み] ですと紹介する場面と、使い分けている?) ええとね、友達同士だったらよく、マージーと紹介します (日系企業なんかでも、マージーで通用するでしょ) そうだともいます。だいたい。(今の貿易会社はどう?) 今の貿易会社は、目上の人が香港人だから、マージーと呼んでくれますけども。(香港人同士は、だいたいマージーとかデビッドでやっているわけね) ええ。(では、普通の広東よみで呼び合うことはほとんどないわけですか) ほとんどないですね。(例えば大学の入試の時はなんと書きますか) 大学で友達同士とか、教授はよくマージーと呼んでくれました。(テストの時は) 名前書くときはF・IWのローマ字。(正式には) 正式にはやっぱりF・IW。でも、ローマ字で。(英語の試験問題の時も、F・IWとローマ字で書く?) [うなづく] (使い分けているわけね) そうです。(1997年3月)

## 例3 英語名だけ覚える・香港人

(いつ、ジェームズという英語名を作りましたか) 中学生の時です。14才です。(どうして、この名前に) ただ単に、いい名前だったからです。ジェームズ・ボンドが好きだった (笑い)。

(そのころ、友だちは使っていましたか) 何人かは。中学で、英語の先生が、クラスで英語名を使わせていました。彼女は、皆を英語名で呼んだので、多くの生徒は、英語の名前を持ちました。(すべてのクラスメンバーがですか) 作りたくない人は、作らなかったのですが、私は作りました。でも、クラスが終わると、多くの人は [その時の英語名は] 使わなかったんです。私は、使いました。人によります。(英語の先生はアングロサクソンの人ですか) いえ、チャイニーズです。(中略)

(英語名を使うメリットは) 言うのも覚えるのが簡単です。大学では、クラスメイトの中国名を知らないこともありま

す。英語名しか知りません。その人を余り知らないとき、英語名は知っていても、中国名は知りません。(中国名を知っているというのは、親しいと言うことですか) 両方の名を知っている。親しければ、両方の名前を覚える (原文英語1997年8月)。

## 例4 軽い気持ち・香港在住華人

むしろ、その方が、自然に呼び合える。だから、私は、嫌な人には、そう言いませんよ、[英語名の] Aと呼んでくださいとは。(ただ、英国人の先生は、絶対英語名を求めると) ええ。というのは、あの頃は、英国の植民地でしょ。英国一辺倒というのがありまして。(強制的に求められることと、自分で使いたいことは違うのでは) でもやはり、便利だから使うんです。もう、本当に軽い気持ちで。(もしかしたら、いやいや付ける人もいるかも知れないと) さあ、どうでしょう。そういう話はうかがったことはないです。嫌ならやめたらいいし。(大陸の人なんかは使おうとしない) と) やっぱり、民族意識が強いんですね。(1997年3月)

筆者が会った香港人が好んで英語名を使っていたのに対し、シンガポール人は、相半ばという感があった。何人かの人が、英語名を使いたくないと抵抗感を表明し、また、家族が英語名を禁止しているとした。これらから、英語名は、ナショナリズムの強さと関係して使われたり使われなかったりすることが分かる。

あるシンガポール人女性は、自分は英語名を使ったことがあるが、それは、会社で初めて会った取引先の人などに対して、「ジェニー・タンです」のように使ったという。それが、変わってもかまわないのだという。親しい友人とは、正式名で呼び合うという。英語の先生が、自分の名前の最後の部分を姓と勘違いして、ミセス・ペインと呼んでいたという体験を持っている。

あるシンガポールの大学の教員によると、試験のたびに英語名が変わってしまい、誰が誰だかわからなくなって困るという。このように、英語名は、かなり軽く使われるものである。何人かの香港人がいうように、対等な関係を作るために、英語名が役に立つという可能性がある。

ある台湾系のシンガポール人によると、高校時代に台湾で、英語の教師から英語名を付けられたという。彼女は、「欧米人は中国名を聞き取れないし、発音できないため、自分たちにわかりやすい名前を付ける」「英語名は心地よくない」という。

日本にいる台湾からの留学生によると、英語の先生から英語名を付けられた経験はないというので、時代によるのかも知れない。なお、例3の香港人は、英語のクラスで英語名を初めて付けたが、

彼の場合は、先生がこうしなさいと言うことはなかったという。先生にもよるが、いくつかの典型的な英語名を提示して、選ばせることが多いという。

香港人に、パスポートに記載されている名前について聞いた。

#### 例5 パスポートの記載・香港人留学生

(BNO=British National Overseasでは、どちらが書かれていますか、英語名ですか、中国名ですか) [彼は、BNOパスポートを見せてくれた。姓の欄と、名前の欄が分かれており、ともに、広東語読みのアルファベットによる記載であった] [これがもっとも正式な名前ですか] うーん、これを作ったとき、まだ英語名を持っていなかったの。(子供が産まれると、役所に行って、記入しますよね、その時はこのようにしますか?) それは、人によります。私の親は、これしか書かなかったが、カンマのあとに、英語名を加える人も多いです。たとえば、「James」のように。(両方が公式な名前になるんですね) ええ。我々の世代だと子どもにはそうします。いとも、このように英語名も書いています。(父親の代は) 書かない傾向があります。(パスポートは、アルファベットですが、出生登録は漢字ですか) 両方を書きます。(あなたは、香港CI=Certificate of Identityも持っていますか) いいえ、BNOがない人だけです。両親は、CIだけです。(原文英語および筆談)

#### 例6 英語名でいわない・台湾人留学生

(それで、英語名として、トニー・レオンは香港人だと思うんですが、台湾ではトニーとはいわないですか) いわないですね。梁朝偉リャン・ツァオウィーと [北京読みで] いう。香港は、英語名が入っている。ジャッキー・チェンとか。(それは、あまり入ってこないのね。日本みたいに全部英語名で、ジャッキー・チェンとかはいわないで) 全部漢字で (漢字で入っていると) ジャッキー・チェンも、僕は日本に来てから知ったんです。それまでは、ツェンロン、ツェンロン (成龍) と言ってた。(北京読み?) です。台湾からは、全部北京読み。(センロンとは言わない) わかりません。(テレサ・テンとも) も、はじめて。鄧麗君デン・リージュンという。大陸2世です。親が軍人ですから。(1997年8月)

筆者の知識では、台湾の華人であるデン・リージュンを、テレサ・テンとしたのは、日本のレコード会社が関与している。台湾では、一時反発があったらしい。これは、独特な現象である。読み方の難しいタレントを、自分たちにわかりやすいトウ・レイクンと日本読みするのではなく、さらに、西洋的な名前にして呼ぶという現象には、西洋人への崇拜という、日本人のコンプレックスが関係しているかもしれない。

英語名は、近世のキリスト教のアジアへの布教

と、クリスチャンネーム (Christian name または Baptismal name) の普及が関係する。

バプアニューギニアの留学生F・E・Fさんによると、最初のFは名前、Eはキリスト教会の名前、最後のFは父の姓である。キリスト教徒の母は彼のことをEという。教会でも、Eと呼ばれる。

日本でも、17, 18世紀においては、クリスチャンネームが多く見られる。その場合、一緒に姓を用いる人と、名を用いる人が混在している。千々石 (ちじわ) ミゲル、ドミンゴ松次郎などがある。

#### データ1 東アジアの英語名使用と発音の保存

筆者は、国際学会プログラムを用いて、香港人らの名前記載がどのようになっているかをカウントしてみた。

1997年8月のアジア社会心理学会 (香港の中国返還後である) で、所属が香港、シンガポール、台湾の、華人系と判断される発表者をカウントすると、表1のように、それぞれ、13人、5人、11人であった。

- 1) 英語名を使ったのは、香港1人、シンガポール3人、台湾1人である。
- 2) 英語名と中国名の混合姓名を使ったのが、香港5人、シンガポール0人、台湾1人である。
- 3) 中国名だけの人は、香港7人、シンガポール2人、台湾9人である。

このことから、香港の人は、中国名 (広東名) か、英語名と中国名の混合姓名を選び、シンガポールの人は、より英語名を、台湾の人は、より中国名を選んでいることが分かる。ちなみに、台湾の人の中国名は北京読みだが、拼音 (ピンイン) 表記ではなく、ウェード式であろう。中国本土の人は、ほとんど拼音で表記している。

### III 現地姓と発音

#### 7 現地姓

移民・移住にともなって、現地の姓を持ったり、新しい姓に「改姓」することが多くの地域でおこなわれている。多くの東南アジアの華人は、その国の姓名を持っている (インドネシアなど)、アメリカでも、移民にともなって、多くのアングロサクソン風の改姓がおこなわれている。日本でも、朝鮮人、台湾人の日本的な姓への改姓がおこなわれた。また、外国から来ている子どもや、日本人と結婚したアジア人の妻に対して、日本名をつける、といった現象も存在している。

平ほか (1995) は、「在日朝鮮人青年」の名前

表1 英語名と中国名

## (a)香港

|             |                      |                   |                       |
|-------------|----------------------|-------------------|-----------------------|
| 英語名         | Cheng, Cecilia       |                   |                       |
| 英語名と中国（広東）名 | Chau, Albert Wai-lap | Wong, W. K. Eva   | Chan, Darius K-S      |
|             | Lau, Ivy Yee-Man     | Ho, David Yau-Fai |                       |
| 中国（広東）名     | Hong, Ying-Yi        | Yang, Chung-fang  | Chiu, Chi-yue         |
|             | Leung, Kwok          | Kwok, Oi-man      | Chan, Wai Lai, Sui Yu |

## (b)シンガポール

|         |                   |                   |             |
|---------|-------------------|-------------------|-------------|
| 英語名     | Chua, Alina       | Chua, Wendy       | Koh, Jessie |
| 英語名と中国名 | なし                |                   |             |
| 中国名     | Hoong, Leong chan | Chang, Weining C. |             |

## (c)台湾

|         |                       |                  |                 |
|---------|-----------------------|------------------|-----------------|
| 英語名     | Leung, Patrick        |                  |                 |
| 英語名と中国名 | Wu, Cynthia Hsin-feng |                  |                 |
| 中国名     | Fung, Heidi           | Leung, Ka Wai    | Chen, Mei-Ching |
|         | Yang, Kuo-shu         | Hwang, Kwang-Kuo | Li, Mei-Chih    |
|         | Chuang, Yao-chia      | Lin, Yi-Cheng    | Yeh, Kuang-Hui  |

の使い分け（シフト）について研究し、本名のハングル読みで一貫する群と、本名の日本語読みや通名（日本の現地名）を併用し、シフトさせる群にわけた。通名の現象は、いかなる意味づけを持っているのだろうか。姓は、エスニシティを何らかの形で示しており、姓を見ただけで、どここの文化の出身の人がわかる。このことは、すでにバングラディシュの留学生の例でふれた。改姓は、異文化間接触の結果（多くの場合、支配と同化）として起こっていると考えられる。

一方、喜んで改姓する例として、タイの華人があげられる。ある中国系タイ人によると、自分には全く華人という意識はなく、アイデンティティはタイ人であるという。すでに、中国名は持っていないという。これは、アメリカへの移民の例にも当てはまる。国によってあまりに感じ方が違うことに、意識を新たにさせられる。

ヨーロッパでも、例えば、モーツァルトは、オランダ系の名前から、イタリアで通用しやすいアマデウスというラテン名に変えたことで知られている。

## 例7 必要による・台湾人留学生

（日本に移住した人が結構居るでしょ、台湾の人で。その場合、日本名に変わる人いるでしょ）変らなきゃだめみたい。（まだ変らないとダメなんですか、今も）変わってますね。（だいたい変わっていますか）でも、普段の時には、やっぱり、台湾、つまり中国の名前で呼んでいて、日本人

との時は、日本の名前を使っている。自分も友だちも何人か居ます。国籍は日本だけど、日本の名前と、中国の名前が二つ、同時に使っている。（中国語や台湾語で話すときは元の名前を）ええ。名刺は、会社の名前は日本語になっている。（ことばによって違う）そう。（戸籍は日本名に）はい。（最近、中国名のまま帰化、と言うか日本国籍とる人増えているらしいですが、台湾の人では知らない？）変わるんじゃないですか。変わらないときもあるんですね。それは自分で判断するんじゃないですか。（そういう人も居るんだ）漢字がないときとか不便じゃないですか。ワープロがでないとか。（日本的にした方が便利だから）そうそう。

（中略）自分も、両方の人間知っているんですよ。ダイエーの監督の王さんは、ずっと王を使っているじゃないですか。（あの人は、戸籍も王さんかしら）だと思います。親が台湾人で、お母さんが日本人かな。お父さんが台湾人で、日本で生まれたんです。もうひとつ、作家の陳舜臣。これも、陳のままで、日本国籍です。出来ますよね。（1997年8月）

ちなみに、現時点では、常用漢字、人名漢字表にある姓のみがみとめられているとのことである。

多くの国で、言語によって、名前を使い分けること、現地姓名を新たに作るということが起っている。北朝鮮在住の日本人妻の里帰り問題がマスコミをにぎわせた（1997年）が、多くの日本人妻は朝鮮名を持っている（例えば、K・KS）。朝鮮では、夫婦は別姓であるので、K姓は、独自につけたと考えられる。



福岡(1993年)によると、帰化などによって日本国籍となった人たちの間で、民族名を取り戻す運動が起こっている。1987年に、朴実(パク・シル)さん、鄭良二(チョン・ヤンイ)さんの、帰化前の民族名への復氏が家庭裁判所でみとめられたという。そして、同様の例が続いていることを紹介している。

佐藤(1996)によると、1982年、ベトナム難民だったトラン・ディントンさんが、帰化するとき無理矢理日本名にさせられたとして、ベトナム名に戻す裁判を起こし、勝利した。それ以後、日本名を奨励はするが、強制は出来なくなったという。

なお、重国籍児は、必ず一度は、日本の(日本国籍の親の)氏を持つというしくみになっているという。

#### 例8 同化できなかった・元在日華僑の体験

(Cさんは、もともと香港出身の華僑の3世であり、親は広東語を使っていたが、両親も兄弟も日本に定住した。彼女は、その後、香港人と結婚し、香港に戻った)

「香港の人は、あなたは何人ですかという質問」に「自分は香港人だ」という人がたくさんいます。中国人だという人は、大陸生まれとか、大陸で育った人とか、私のように、華僑だとか。私は香港人だと自分では言えない。何人か。日本人でもない。やはり私は中国人。(日本では何代)3代目です。母は日本生まれです。(中略)兄弟は、全部、日本人の奥さんです。ですから、ほとんど日本人です。(名前なんかは)元々のCです。こういうことがあるんですよ。日本と中国とが国交を回復する時点で、台湾の籍にはいるか、中国の籍に入るかの選択があったんです。それから、日本の籍に入ってもいいと。それは、中国本土との関係。台湾人は、絶対に日本の名前の名前を作らなければいけない。木村さんとか、田中さんとかにした。(いつですか)台湾人の場合ですよ。もし日本の籍にはいった場合ですよ。日本の問題ですよ(その頃そうだったんですか?今は可能なんですけど)今は、陳さんでも王さんでもいいんですか。(ええ)それは、私の兄が日本の籍に入っても、やはりCという名前です。それは自由選択。というのは、私どもは、中国から行った中国人。台湾の中国人は、日本の名前を付けた。(ご兄弟は日本籍に入られて、名前も同じ?)同じ。(中略)(華僑でいらしたということで、普通の広東人とはどこか違うということはございましたか)私は、香港の人からは日本人と呼ばれている。あなたは日本人ですと。でも、私は、日本人だといわれることに対して、抵抗を感じるの。どうしてかという、日本で生まれて育っても、日本の国籍はあたえられなかったと。ですから、私は中国人として大きくなったの。香港に来たとたん、あなたは日本人だと、日本の考えだという具合になじられるんです

ね。(たとえば)そうですね、どういことでしょうね。先生とかそういう人をね、礼儀正しく譲るでしょ、それが日本人だということです。中国人もそういうところありますからね。そういうこと別に考えて大きくなったわけじゃない。うちの母は、あなたは中国人なんだから。日本語も日本人以上に話せなければいけない。中国語もできなければいけない。全部人よりよく出来なければならないという風に育てられた。だから、今日言葉には不自由がない。非常に感謝しています。(中略)どうして日本人と呼ばれていやなのか、自分でも分からない。(分かりますよ。同化する圧力があったというか)同化できなかったんですよ。日本人として、国籍も与えられなかったし。アメリカの場合は、また違うんです。生まれるとナショナルリティがもらえます。アメリカにいる華僑は、レイスはアジア人でも、アメリカの国籍で、心はアメリカじゃないでしょうか。(国籍が大きい意識を占めていましたか)日本人の間に入っても、りっぱな中国人として受け入れられるようにと。といって私が日本人だといっても、日本ではアクセプトされない。例えば、結婚の問題になると、今は、国籍のある結婚をしていますが、私たちの時代は、私がいいと思う家柄、家柄というとおかしな言い方ですが、いいうちの人は、決して外国人をめとらない。(1997年3月)

さて、英米人は、香港では中国名を使っているのであろうか。香港人に聞いてみた。

#### 例9 英米人の中国名・香港人

(アメリカ人、英国人を、中国名で呼びますか。パッテン総督のことを、たしか)彭定康バン・テンホンです。もし彼らが中国名を持っていれば可能です。(香港では、広東語で彼のことをバン・テンホンと呼びますか)彼はニックネームがあります。肥彭フェイバンと言います。太っているからです(笑い)。(ときどきは、バン・テンホンとも)ええ。(クリス・パッテンとは)はい、言います。ある時は。(英語を話してるときはクリス・パッテン?)ええ。(広東語を話してるときは、バン・テンホンかフェイバンと言いますか)混ざっていますね。広東語をしゃべっていないながら、クリス・パッテンということもある。(例えば、米国人、英国人の学生はたくさんいると思いますが、中国名を持っていますか)普通はもっていません。1人だけしか知りません。彼は、広東語をしゃべれるので。奥さんが中国人で。(広東語をしゃべるときは、広東名をつかうんですか)そうです。(原文英語)

沢田(1994)は、前香港総督デビッド・ウィルソンは、魏と名乗ったが、北京語ではウェイだが、広東語では、ンガイであったとし、さすが「北京しか見えていない男」といわれただけのことはある、としている。

#### 資料3 現地姓、改姓、創姓

### 1) 現地姓

上に見たように、歴史的には、現地姓をつけることは、多く行われていた。外国人が滞在・移住する時、その国に合った名前（現地名）を付けることが多かった。

王（P96）によると、明代永楽年間に、中国籍となったユダヤ人医師「俺誠（えんせい）」は、「功有るを奏聞するをもって、趙姓を欽賜」された。このことは、ユダヤ人が中国で現地名を持っていたことと、さらに別の姓を皇帝から与えられたという事を示している。

日本で、江戸時代、家康の政治顧問を務めたウィリアム・アダムスは三浦安針、ヤン・ヨーステンは、耶揚子という日本名を持っていた。明治時代のラフカディオ・ハーンは、小泉八雲になる。

明末の遣臣で、民族的な英雄となった鄭成功は、日本の平戸で生まれている。彼は日本名を田川福松といった。帰国後、鄭森とし、のちに国姓「朱」を与えられる。その後、日本人や東南沿海の人々が、彼のことを国姓爺（こくせんや）とよぶのは、このためである。

### 2) タイ族、満州族の改姓

多くの東アジアの民族は、中国的な姓を付与されてきた。王（P99）によると、雲南のタイ族の統治者チャオ・ピエンリン（召片領）は、1527年に明朝より、刀姓を下賜されたが、タイ貴族が外との往来で漢字名を使用するときのみに使われた。

満州族の愛新覚羅（あいしんかくら）姓は、清朝滅亡後、満州語の愛新の意味をとって「金」となり、多くは金友之などの金姓に改められた（P91）。

### 3) 朝鮮での中国風の姓

朝鮮半島では、姓の初見は、372年百済（くだら）王の餘句であり、413年の高句麗王の高王連である。孫（1995）によると、単姓と土着的な複姓が併存し、隋書、晋書にみられる百済の大姓は沙、燕、木などであり、高句麗の大姓は高、馬、蕭などであるが、三国史記や日本書紀などでは、沙宅、燕比、木苧、仲室、少室などの複姓が見られるとする。固有の姓を、中国的な姓に変えてゆく流れがあったと考えられる。新唐書によると、新羅の王は金姓、貴族は朴姓であるが、民には氏はないとされる。金姓は、新羅の原号ソプルのソが金の意味であることと関係していると考えられる（司馬ほか P127）。

### 4) 日本人の中国風の姓

日本では、すでに見たように、倭姓が用いられた（宋書）ほか、隋書には、国王のアメノタリシ

ヒコの姓名として「姓は阿毎、字は多利思比孤、阿鞞鷄佳弥と号す」とある。小野妹子を小妹子の音から「蘇因高」としたほか、粟田を「阿」、額田部を「哥」とする例がある（吉田）。朝鮮半島が、中国式の姓を維持したのに対し、日本では、倭武を最後として、中国的な姓の秩序から離脱している。一方で、国内では、ウヂ、カバネを朝廷が賜与する体制をつくりあげる。天皇家には、姓氏はなくなった。

### 5) 中国内の改姓

王によると、中国では、改姓は多くなされ、複合姓を単姓に変えたり、有力氏族の名前に変更するなどのことが多かったという。中国では、皇帝が自分の姓を下賜する習慣があった（漢では劉姓、唐では李姓、明では朱姓）ほか、有力な姓（門閥）に改姓する傾向があり、大姓の現象が起こっている。「張王李趙劉、天下に満つ」とか「陳蔡李林王で天下の半分」といわれるのはこのためである。

### 6) ユダヤ人の創姓

田中によると、ユダヤ人は、どの国家においても、氏をもたない異分子として存在してきた。18世紀末頃、いくつかの地域で、ユダヤ人の創姓が始まる。ナポレオンの支配下に入ったウェストファーレン王国では、1808年3月31日勅令をもって、すべてのユダヤ人は3カ月以内に氏を定めるべしとされた。ただし、地名、旧約聖書の中の名、名家の名を禁じられた。

一方で、1938年8月17日のドイツのナチ政府の法律では、ユダヤ人が姓を変えることを禁じている。これは、ユダヤ人に対する人種主義である。

### 7) アメリカでの改姓

田中によると、アメリカでは、大量の移民を受け入れる際に、ドイツ風やスラブ風の長い名前を、入国審査官がわかりやすく変えて、意図せずに名前を作ってきた（Kaganoff, B. C. A Dictionary of Jewish Names and their History, 1977）。ユダヤ人のグリーンベルクがグリーンに、ラザロヴィチがレイトンに、ボロツキーがベルに変えられたという。コーエン、コーヴァチ、コヴァルスキー、コロナキスなどは、コール（Cole）やケイ（Kay）にされている。田中は（P108）「多くのアメリカ人は、英語だけが人間のしゃべる言葉だと思っているから、そのような自分たちの感覚とそりの合わない名を許さない」とする。また、「ユダヤ人だとして目立つことは、彼らの立場を著しく困難にした。医学部に子どもを入れたと思う親は、アメリカ風の名に改め

る」という。

## 8 姓名の発音の保存

日本においては、外国人の漢字の姓を呼びかける際に、日本の音読み（現地国読み）発音で呼びかけるべきか、出身国（母国読み）発音を保存して呼びかけるべきかという問題がある。これらの意味について歴史的にも、心理学的にも、相対的な知見が必要である。アジア各国で起こっている現象をふりかえることは、これらの「発音の保存」の現象の意味を読みとくカギになるであろう。

筆者は、シンガポールで華人にこの事についてのインタビューを試みた。シンガポールの特徴は、福建、広東、潮州、客家の音が、アルファベットによって保存されているということである。筆者はこれを「外来音保存」と名付けようと思う。

### 例10 英語（タン）とマンダリン（チェン）・シンガポール人（要約）

シンガポールでは、アルファベットが音を保存しているため、英語では、それぞれの読み方を尊重して呼んでいる。陳という名前は、福建語と潮州語では、タンである。広東語では、チャン、タンの両方をつかう。福州はキン、客家は、梅県ではチェン、その他の客家はチンといった具合に、5通りぐらいある。お互いに、同じ陳でも、タンさん、チェンさんと、別の名前であるかのように呼び合っている。ところが、マンダリンをお互いが話すときは、これらの音の保存が一気に無くなる。つまり、タンも、チャンも、マンダリン音のチェンとなる。マンダリンを話すときは、お互いが同じ陳（チェン）姓だという意識となる。（1997年3月・原文英語）

このように、マンダリンを話すときは、華人の姓名は、マンダリン発音にする。筆者はこれを「中央音での変容保存」と名付けたいと思う。英語を話すときは、相手の姓の発音をいわば「外来音保存」し、尊重する。

さて、香港人は、相手の出身地の発音を「外来音保存」しているのだろうか。

### 例11 トン・チーワとトン・キンワ・香港人留学生

（董建華さんは、広東語で）トン・キンワです。（彼は、トン・キンワと言ってますか、あるいは、マンダリン読みで言ってますか。）香港ですか。（ええ）広東語でしゃべるときは、広東読みで言います。でも、実際は、彼の名前は、マンダリン発音のトン・チーワ（Tung Chee Hwa）です。（彼は、時にトン・チーワと言いますか）それが、彼の名前です。[広東語ではトン・キンワです]（英語では、チーワ・トンというわけですか）そうです。あるいは、

C. H. Tung と書いています。（香港でも一部の人は、英語でマンダリン読みの名前を使いますね）それは、中国で生まれた人です。（陳は広東語で）Chan です（北京語で）Chen です。（Chen と称している人のことを、Chen と呼びますか）いいえ。広東語をしゃべっている時は、Chan といいます。英語では、違います。（英語では、ミスター・チェンのままですか）ええ、Chen と呼びます。（テレサ・テン鄧麗君は、何と言いますか）ドン・ライクワンと呼びます。[彼は、まだ若いため、テレサと香港人が呼ぶかどうか、よく知らないと言う。]（アニタ・ユンはアニタと言いますか）猿詠儀（ユン・ウェンイ）と言います。（香港ではアニタとは言いませんか）一般的ではないです。ある人は英語名が一般的です。人によります。（アンディ・ラウは言いますか）アンディは一般的です。（日本では、香港のスターは、だいたい英語名を使います。香港では、場合によりますか）両方つかいます。ある人々は、中国名で有名です。ジャッキー・チェンは、成龍（セン・ロン）といいます。中国名を使います。（原文英語）

このように、広東語でも、発音は「外来音保存」されない。つまり広東語よみで「変容保存」されるということが分かる。これを、「中央音での変容保存」と区別して、「現地音での変容保存」と名付けたい。表音文字は、ローカルな外来文化を保存し、尊重することが出来るというメリットがある。表意文字の文化では、基本的には音よりも文字を重視する。

ところが、台湾では、漢字の名前は、基本的に北京読みで入って来るという。

### 例12 台湾語禁止と北京音・台湾人留学生

本省人ですよ、台湾のもともの。一つのグループですよ。もう一つのグループは、蒋介石が連れてきたグループなんですよ。もう一つは、原住民ですよ。日本で言えば、北海道の（アイヌ）アイヌとか（高砂族）そう、3つのグループがあるんですよ。映画（悲情城市）の内容は、外省人が台湾に来て、台湾人との摩擦、嫌みとか、いじめとか、そういうこと。（で、ずっと台湾には、二つのグループが、すこし緊張関係があるわけですかね）ええ、政党も。（中略）ですから、昔、小学校の時は、本当は、自分の言葉は台湾語なんですよ。でも学校では台湾語使っちゃいけません。一方的に強制されたんです。つまり、北京語が中国の共通語であるということで、公の場合は、北京語ではなしなさい。家では台湾語をしゃべってもいいんですが。それは、小学校の時、結構印象に残ったんですよ。学校で台湾語をしゃべったら罰金とか、体罰されるとか、結構ひどかったんですよ。（先生から）先生から。（それは、本省人の先生からも何かされますか、外省人・・・）そうそう、文部省からそういう命令が。つまり、そうしないと、統一できないじゃないですか。言葉は。（中略）（Tさんが

友だちと台湾語でしゃべっていたらこの映画はなんといひますか) これは、台湾語読みでしたら・・(普通しない? 台湾語で普通しゃべっていても・・) 漢字読みの時は、自然に北京語読みをするんですよ。台湾は今おもしろいんですけど、普段は台湾人同士は台湾語でしゃべって、難しい漢字ができたら、それも新しい単語の場合は、北京語で説明しているわけですよ。映画の場合は、新しい場合は、北京語で解釈しているんですよ。台湾語は、やっぱりもとの言葉ですから、そんなに新しいものには、対応できないんじゃないかな。(台湾語で悲情城市は) ハウ、・・言わない。パイテンチョンシュー [という北京語読みをする]。僕は、台湾読みでT・TYと呼ばれるんですが、北京語T・TYと少し違う。(日本語にちょっと近いんですね) そうですね。発音的には日本語に近い。家では、親は台湾語の呼び方で呼んでいるんですよ。TYと。(1997年8月)

このように、中央文化、あるいは支配文化は、その発音、言葉を強制する。これは、歴史的には、エスニックコンフリクトと関係がある。

広東文化は、それ自体、語彙も豊富で、北京発音の名前をも広東読みする「現地音での変容保存」がある。ただし、香港で使われる英語の方が、北京中央音に忠実になりつつある。英語では中国の人名、地名が、広東音から北京音に移行しつつあるようである。

たとえば、珠江は広東語でJyugongであるが、英語では北京語のZhujiangが使われるようになっていくという。

台湾文化は、外来の人名や新しい語彙を、「外来音保存」も「現地音での変容」もしない。つまり、成龍はセンロンではなくて、ツェンロンという北京読みで、いわば「中央音による変容保存」で取り入れている。

田中によると、ドイツ語のハインリッヒ、フランス語のアンリ、英語のヘンリーのように、自動的に読み変えられる例がたくさんあり、外国人の名を自国風に呼び変えることはほとんど抵抗がないという。実態は一つだからである。これは、現地音での変容保存の例である。

ある香港在住華人によると、C姓は日本では発音が少し異なるが、日本語で呼ばれることは全く気にならない。広東語音も、北京語音と異なるが、分かりやすければどちらでもいいという。

#### 例13 香港人の順応性・香港在住華人

(別に嫌じゃないんですか、マンダリン読みされても) 嫌じゃない、分かりますから。それをいちいち考えていないでしょうね。自分が呼ばれていると分かるから。マンダリン読みでは自分はどうか呼ばれるかというのは、わきまえている。中国人ていうのは、順応性がある。とくに香港人は。

目先が聡いと申しますか。(どちらで呼ばれても別に) すごい順応性がある。日本語熱が起ると、日本語を一生懸命覚える。(中略) (そこで、たとえば、Cさんが日本で、D(Cの日本音)とよまれることがあります) Dといわれることがほとんどです。(その場合嫌だと思わないんですか) 別に。広東語で読めばEですからね。DでもEでも、分かるように読めばいいんじゃないですか。わたしはDさんDさんとよばれています。(1997年3月)

中国人は、自分の名前が日本語発音で読まれても(つまり、日本語音で変容保存されても)、余り気にとめない傾向がある。これは、漢字の存在が大きい。つまり、張さんは、チョウでもザンでもチャンでも気にならないし、陳さんは、チンでも、チャンでもタンでも気にならず、同じ漢字の名前であるという意識がある。

#### 例14 日本読みで教える・台湾人留学生

[陳さんをタンと言いますか、チェンと言いますか] 台湾人同士では、普通はタンというんですよ。でも、これ難しいですね。正式の場合は、グループがあるんですよ。外省人とか何人か入っていると、最初はチェンで北京読みで紹介して、北京語で紹介したあとに、台湾人の人たちが。もう、すぐわかるじゃないですか。タンと言う呼び方が。

(最初は、公式に言って、少しくだけると) 台湾語で。(中略)(あと発音。日本人が、タンさんやチェンさんをチンさんと呼ぶことを、気にしないですか) それは、やっぱり必要性ですから。日本人にD(北京音)でいくら教えても、きれいな発音はでてこないじゃないですか。正しい発音が。そしたら、自分も何回も説明しても、返事がこうですから、ああ、Dでいいよとか、分かるから。別に、正しい発音で呼んで欲しいではないし。(じゃあ、会ったときから日本読みで教えちゃいますか、それとも) D(日本音)ですと。(最近では日本読みで) 10人のうち、3-4人が、中国語の発音は?と言われるんですよ。興味のある人は、中国読みとかを。(その場合、北京読みを教えるんですね) そうです。(1997年8月)

一方、ハングルが基本的に表音文字であることが関係していると思われるが、多くの韓国人は、ハングル読みで自己紹介をしてくる。

また、在日韓国人のチェ・チェンホワ氏が、チェ・チェンホワという名刺を渡しているにも関わらず、NHKのテレビで自分の発音をサイ・ショウカとしたことに抗議し、1983年、最高裁は、名前の人格権を認めたが、同時に、読み方は慣習であるとして、NHKの主張をも追認した。NHKには、漢字の崔昌華の意識があった。サイ・ショウカという言い方は、筆者の概念では「日本音での変容保存」である。1984年以降、相互主義の観点から、日本のテレビ、ラジオでは、ハング

ル読みをするようになっていった。韓国では、日本人の名前は、日本語読みされる（つまり、外来音保存）という。そこで、日本においては、金大中（キン・ダイチュウ）はキム・デジュン、金泳三（キン・エイサン）はキム・ヨンサム、盧泰愚はノ・テウとなった。辞書には載っていない音読みである。

現在、日本の新聞では、漢字だけで韓国人の姓名が書かれることが多い。テレビ、ラジオではハングル音だけを呼んでいる。一般にハングル音で呼ぶこととするならば、新聞でもカタカナで書くことが必要である。ちなみに、最近の韓国では、漢字を用いることが減り、多くの韓国からの留学生は、漢字が読めなくなっている。これらの背景は、中国でも日本でもない韓民族というエスニック・アイデンティティの強さであると考えられる。

また、佐藤によると、戸籍名には仮名をふる覧がなく、日本読みをされてしまうため、ふりがなの覧を作るよう運動があるという。

次に、韓国人の名前は、すべてハングル読みで呼びかけるべきなのか、という問題が起こる。このことについて、筆者の同窓であり友人である作家の姜信子（きょう・のおこ）は、「ごく普通の在日韓国人」（1987）で、在日韓国人のごく普通の感覚を我々に示してくれた。彼女が初めて実名で学校に通ったのは、大学に入ってからである。しかし、本名といっても、カン・シンジャとするには、「何かそぐわない感じがしていた」という。自宅でも日本語読みのノブコで呼ばれていたし、竹田存子からキョウ・ノブコまではたどり着けても、「カン・シンジャへと飛ぶのはとてつもない勇気がある。素朴な感情として、キョウ・ノブコがその時の私の在日韓国人としての限界だった」とする。そして、現在もキョウ・ノブコで名乗っている理由として、日本人でも朝鮮人でもない、在日韓国人という意識を込めているという。

基本的には、どの人にも、その人が呼んで欲しい呼び方で呼ぶのが礼儀である。田中（P203）は、固有名詞を守り、正しく読むことは、巨大国家と巨大文明に押しのけられたつましやかな生活に思いをはせる、エコロジー運動の一つであるとしている。

ちなみに、韓国では、外来音をどのようにとり入れているのだろうか。香港人のアンディー・ラウは、韓国では劉徳華の漢字音（広東読みでラウ・タクワー）を、ハングル現地音で変容保存をして、ユ・ドクファと呼ばれているときく。この

辺の事情をさいてみた。

#### 例15 最近是北京音で呼ぶ・韓国人（要約）

（鄭小平を何と言うか）トゥム・ソッピョンと言う。韓国では、ずっと漢字を使い、ハングル音で読んでいたが、最近、中国式の読み方で呼んでいる。当時から有名だった人は、そのまま［ハングル音で］呼ぶ。日本人は橋本をそのままハシモトと言う。私の子供時代から、日本人は日本式に呼んでいる。（江沢民は何というか）彼も前から居るので、カン・テンミンと言う。しかし最近のテレビでは、チャン・チョーミンと言う。最近では、中国人の名前は、中国式発音で使う。（いつぐらいからか）3年ぐらい前か。はっきりとは言えない。（1997年10月）

このように、韓国では、最近では外来音で、外国人の名前を発音する傾向が徹底されている。これは、漢字を用いずに、ハングルで記載する傾向と関係があると思われる。

さてアルファベットが、外来音の保存にすぐれているともいえないようである。ある人の話では、Hisao という日本名を、アメリカ人は、ハイセイオとか、ヒスとしか呼んでくれないという。英語が発音を外来音保存するとは限らないのである。

#### IV 関係名・俗名

##### 9 関係で呼びかける現象

筆者は日頃、日本人とのカウンセリングの際の「相手に対する呼びかけ名」に関心を払ってきた。子どもの問題で来談する日本人の母親に「お母さん」という呼びかけをすることがある。もちろん、名前や姓で呼んだりすることもある。彼女たちも、配偶者のことを「主人」「お父さん」と言ったり、敬称なしの苗字で謙遜して言ったりする。また、自分の子どものことを、「上の」、「2番目の」などと表現する。

筆者は、名前ではなく、関係によって指し示す現象に注目した。これらは、東アジアの国に存在するだろうか。これらをふりかえることにより、日本が無意識的に体験している文化現象を意識化することができないか。

姜信子（1993）は、韓国では、相手をお呼ぶとき、ハングギ・オンマ（ハングギちゃんのお母さんの意味。普通子持ちの主婦はこう呼ばれるという）とか、ヨンスギ・オンマといった呼び方があることを紹介している。

#### 例16 ○の母、師母任・韓国人

（韓国では、子どもの名前と、オンマをつけてよぶと聞き

ましたが、多いですか)奥さんたちの間では普通です。(子どもが多いときはどう呼ぶのですか)例えば、長男長女の名前を使います。子どもの中で、一番知らせているこの名前を。だいたい、長男の子の名前です。

(バクさんのお母さん、という言い方はありますか)尊敬語として、サムンニンと言います。先生の奥さんと呼ぶとき。それが普通になりました。部下が上司の奥さんと呼ぶときそう言います。師母任。あるいは、夫人ブインと言います。(金さんとか呼びますか)奥さんの姓はあまり呼ばない。妻を紹介するとき、謙譲語で、アーネと言います。元々は、うちの太陽という意味から来ています。あるいは、妻 cheo と言います。(1997年10月)

これは、筆者たちが、子どもの問題で来談している母親を「お母さん」という言い方で呼ぶ現象と関係している。筆者は、お母さんという言い方を控え、個人として面接をしようと、「名前」で呼んだこともある。人によっては「あなた」をつかうかもしれない。「夫の姓」で呼ぶことは、夫婦別姓時代において、夫に従わせるような意味を暗に持つ可能性もある。逆に「お母さん」という言い方は、母親と子どもとの距離を近づけ、母親らしくさせるようとする意味(母親であることを期待する意味)を持つ可能性もある。筆者は、長らく、母親である女性の呼びかけ方の文化的な脈絡に関心を持ってきた。

歴史的に、相手を、人の関係の中での位置で呼びかける文化があった。これを、筆者は関係名と名付けたい。先に述べたように、清朝時代の中国の婦人は、○の妻、○の親、といった用語で自称した。これは、朝鮮でも、同様であったという。

#### 例17 子どもの母と呼ぶ・台湾人留学生

(近所のおばさんに対して、なんて呼びかけますか。苗字で何々さんと言いますか、誰のお母さんと言いますか)やっぱり、阿をつかって。(名前?)名前じゃないけど、いろいろあるんですね。漢字はずっと難しいですよ。(そういうの知りたい)そういうの分からないです。(カタカナで)アサンとかアムー。50歳以上のおばさん。知らなくても、例えば、道を教えて欲しいときに、「アムー、アムー」とか、「アサン、アサン」とかいう。台湾語ですね。男の場合は、アペー(阿伯)という。(それで、韓国の人がよくね、何とかの母、例えばヨンスギ・オンマさんというんだって、そういう言い方はない?)それもあるんだけど、それはもう知っている(親しい人だけ)例えば、何々のお母さん、という言い方があるんですよ。たとえば、僕は、E[姓]としたら、お母さんを、Eママ(E媽媽)という。ママは、お母さんの意味です。北京語で、Eママ。(それは、人が言うときに?自分が言うとき?)人が言うときに。(Eママ)居ますか、とか。(苗字の方をいうわけね)はい。(お母さ

んの方は別の姓でしょ)。これ[E]は、お父さんの姓だから。お父さんの姓でだいたい。(あ、そう)でも、職場では、自分の姓で言ってるんですけど。(じゃあ、夫とか息子の姓で呼びかけをするわけね)呼ぶときは。はい。(昔からのやり方)そうですね。台湾文化は、男の姓を上に乗ねたり、あるけれど。今はそんなにないです。今の女性は強いですから。一般的には、男の姓で言ってるんだけど。たとえば電話かけたときなんかでは、自分のお父さんの姓を使って、お母さんのことを呼んでいる。Eママとか。(職場で実家の姓を名乗っていても、友だちとかが夫の姓で呼んだりすることはありますか)ないことはないけど。(こういう言い方の時だけ)はいはい。(1997年8月)

つまり、台湾では、陳さんのお母さん、とか王さんのお母さん、というように、息子との関係で呼びかけるというのである。このように考えると、日本で、クライアントに対して、このように呼びかけるのは、東アジア文化の古層に位置するやり方であると考えられる。文化の古層に働きかけることの治療的な意味については、北山修(1993)が論じている。夫の姓で呼ぶことに関しては、やはり、文化的には古層に位置し、不自然なことではないのかも知れない。

このほか、韓国では、関係の深まりによって、相手の呼び方が変わるという。「今日からオッパ(お兄さん)オンニ(お姉さん)と呼んで」という現象がある。(姜P96)。韓国では、兄弟関係に擬して呼ぶのである。

#### 10 階層名・役割名

日本企業が海外に出て行く際に、多くの日本人が「現地の人が、ファーストネームで目上の人を呼ぶ」ことに驚く。日本人は、課長、部長、専務といった呼び方から抜けられないことが多い。これらの階層関係を表す呼びかけ名は、どのような意味の脈絡を持っているのであろうか。相手を、階層の位置で呼びかけることも、「関係名」に含ませることが出来るのではないだろうか。

中根(1967, 1972)のいうように、日本社会ではタテの関係を明確に意識させられる。日本社会では、相手が、自分より先輩か、後輩かによって、名前の呼び方も違ってくる。

#### 例18 上下の差・韓国人(要約)

韓国では、上下の差は大きく、親、兄、先生の前ではタバコも吸わないし、正座をする。日本、先生の前で吸っていいといわれても、自分自身で、出来ない気持ちがある。今は、教師から生徒への体罰も多いが、2年後に、体罰は出来なくなる。法律で、先生が学生に対して使う言葉遣い

が、丁寧に変化することになっている。(1997年4月)

これは新聞で見た。98年度から、尊敬語をつけることになったという。体罰が禁止される。今までは、生徒が怪我をしても、親は、子どものためにしてくれたと思っていたし、今もそれは強い。学生を呼ぶときは、韓国では、「君」をあまりにつけない。〇〇〇だけで正しい言い方である(姓と名を両方とも言う)。会社では、〇〇〇氏だ。部下から上司を呼ぶときは、職名をつけ、金課長任(ニン)と言う。上から下を呼ぶときは、氏をつけるか、職名、たとえば、課長からその下は、キムダイリー(代理)とか、キムケジャン(係長)と呼ぶ。日本は、課長、社長と言うが、韓国では、任をつけることが多い。(1997年10月)

#### 例19 先生の敬称・香港人

(あなたが、教授と話すときに、例えば英語の時、ドクター・チェンですか、デビッドですか、チェン老師ですか) 先生の前で対して話しているときか・・によります。(前にいるとき)もちろん、プロフェッサー・チェンです。(広東語の時、陳老師といえますか) うーん、大学では普通は言いません。大学では、英語が使われます。ハイスクールでは、「先生」センセイと、日本のように言います。老師は一般ではない。中国では言いますが、香港では。(道教とか、仏教寺院では使いますか) 一般的ではありません。(教授のことを友だちと話すときは、これを使いますか) ええ。英語名を使います。(デビッドのように、教授に言えませんか) 何人かの教師にはOKです。(若い先生ですか) そうです。普通は、よりていねいな方がいいです。(原文英語)

#### 例20 老師の敬称・台湾人留学生

(職場ではファーストネームで呼ぶことは多いですか。阿を使わないような人は) シャオチエとかシェンセンとか。女性なら、シャオチエ(小姐)、男には、シェンセン(先生)でDシャオチエ、Dシェンセンという。先生は「さん」のこと。シャオチエはいくら歳とってもシャオチエ。(年上の人も年下の人も) だいたい歳下だけど、でもシャオチエといったら若いというイメージがあるわけですよ。40代の女性に、シャオチエといううれしいわけですよ。シャオチエは、まだ結婚してない、若くみえる。それが、女士は、歳とった、結婚した、ニーシー。これはすごく固いですが、手紙とかにはこうかく。先生、小姐は、一般的。(さんみたいな) そう。(それは、年上だけ?) 先生の場合は、関係ないですね。(年下には何といいますか。変えますか。後輩には。日本だと随分差がつくけど) そうですね。それは、親しい場合は、小シャオがつくですよ。僕の場合は小D(シャオD)。歳上は、老D(ラオD)。これは親しいとき。知らないときは、先生というんですよ。最初は知らないから、D先生(Dシェンセン)。ちょっと親しくなると、Dシェンセンと言わないでと、まず僕から言うわけですよ。僕は年下ですから、D先生といわれたら、恥ずかしいから、小Dとか阿Eとか(言ってくださいと) 呼ん

でくださいという感じで。最初知らないときは、先生、先生、といって、長く付き合ってから、こういうのやめて、小とか、たまに、冗談ばいときには、老をつかっても。とくに、台湾と中国、あと、日本の文化も入っているし、あとオランダも入っているし。日本の前は、オランダ、スペイン。もっと前ですね。(残っている文化は) あります。

(中略)(例えば、日本の場合は、会社ではなにに部長とか、課長とつけるんですよ。これは) はい、あります。いっしょです。(老何々とかは) それは、親しくなってから。

(親しくなったら、老とか先生とかですか) 先生でもいいですけど。(これ、どっちが多いですか。大きい会社で、自分の部長に対して、普段。日本だったら部長とかいいますね) 直接、部長、課長と言うんですよ。(何々部長の場合も) 多いです。これは一緒と思う。(何々君という言い方は) ないですね。絶対ないですね。小とか阿とか。(老〇のほかに、〇老師は) 先生のこと。(これは先生に対して?) はい。D老師、チャン老師。(普通の人へのこれとは違う) 全然違う。老師はもう絶対上。(偉い、自分の先生) 先生。これは、一つの単語として。(先生に対して、老師以外いうことはありますか。例えば、先生とか、老何とか) つかわないですね。(先生は) 老師だけ。先生は日本読みですから。漢字の場合は、何々さんといういみ。これも日本に来てから知ったんです。(香港とはちがうんですね)(1997年8月)

このように、韓国文化、中国文化においても、日本と同様、上下を尊重する文化が残っている。ここで、日本の「さん」付けの文化は、対等な関係を作ろうとしている点で注目しうる。香港人は、対等な関係を求めて、英語名を呼び合うことを選択しているが、日本でも類似の現象(文化接触としての第3のやり方)は、「さん」付けといえるかも知れない。

日本では、役柄で人を呼ぶことが多いが、ある役柄、役割の名前を、そっくり継ぐことが出来る。例えば、相撲の二子山親方、歌舞伎の市川団十郎は、代々引き継がれている。

#### 資料4 実名秘守と俗名・幼名

最近の民族学、文化人類学の成果で、東アジア圏を相対的に考えることが出来るようになった。竹村卓二(1982)は、中国南部から東南アジア北部を研究し、タイ北部のアカ族、ヤオ族の例から、実名秘守の現象を紹介している。

アカ族では、出生とともに、実名と俗名の二つの名前を与えられる。実名は、父の名の末尾を、子どもの名前の首部に引き継いで行く、いわば「しりとり式」の名付け方をする。この実名は、口外することをタブーにしており、平常は、もっ

ばら俗名で呼び合う。みだりに実名を口にすると、邪悪な精霊の攻撃目標にさらされると考える。つまり、実名と本人とを、靈的次元で同一視している。

古来、中国でも実名を忌み名として敬避する傾向があったという。わが国上代でも、高貴な人の実名を口にするのははばかりの習慣があった（これは現代にまで引き継がれており、例えば、我々日本人は、昭和天皇の実名である裕仁を、口にはせず、当時は今上天皇、あるいは、天皇陛下とよび、現在は昭和天皇と呼ぶ）。

ヤオ族では、幼名で、老太、老二、老三といった出生順の数字で名を付けることがあるが、これは、日本の一郎、二郎、三郎に相当する。

王（P194）によると、三国志の劉禅のまたの名は、阿斗（あと）であり、曹操のまたの名は、阿瞞（あまん）である。これらは、彼らの幼名である。幼名を付ける風習は、漢代にすでに記載がある。古人は、よく十二支によって幼名を付けた。

島村によると、個人名には、小字（小名、乳名）、学名（書名）、字、号、諱（いみな）、諡（おくりな）などがある。本名としては、小字、学名、字が相当する。小字は、縁起の良い吉名をえらぶほか、故意に、汚名、悪名を付けて、悪霊の耳や目をそらし、災厄を逃れ、愛児が、無病息災に成長することを願う場合がある。多子家庭では、出生順に、二牛、三牛、または、三虎、四虎、あるいは、六妹、七妹などをつける。中国の中、南部では、阿Q、阿鳳、阿火、阿毛のように、〈・・・ちゃん〉、〈・・・どん〉に相当する「阿」を添えるものなどがある。学名は、父または教師が命名し、大部分の人は、終生本名（実名）とする。

異文化間心理学者、鈴木一代によると、インドネシアのバリ島では、基本的に4つの名前しかない。最初の子はワヤン、2番目はマデ、3番目はニョマン、そして4番目がクトゥットである。5、6、7、8、9番目は、また戻ってワヤン、マデ、ニョマン、クトゥット、ワヤン・・・と続く。バリエーションとしては、長男がゲデ、長女がブツになる場合がある。敬称は、カーストによって決まっており、ブラーマナなら名前の前にイダ・バグスが、ウシア（貴族）ならグスティがつくが、一般大衆のスードラには敬称はない。

バリ島においても、実名守秘により、俗名、出生順名をつけてきたのだと考えられる。

## 11 阿をつける呼び方

### 例19 阿をつける・台湾人留学生

（阿〇、という言い方はありますか）あります。僕も、阿Yというんです。（中略）友だちの愛称ですね。阿Yとか。

（友だちとか、親とかが）阿がつくのが多いです。（阿Yと）必ずとはいえないですが、阿がついたら、日本語のちゃんのような、小さい子の感じがする。（ということはTYのYの方が意味が大きいということですか？）いや別に。読みやすいように、たまに真ん中の字で読んでいることもあるし。かならずしもないです。みんなそうだいたい呼んでいる。昔からの流れで、TYの場合は、阿Yとよぶ。（で、親しい人じゃないと、こういうことは言わないわけですね）そうですね。（例えば、お母さんのことは）阿母アブー。

（お父さんは）阿爸アバです。阿がないときもある。パパのパ。（パパと2回いうときも？）あります。それは、西洋からの感覚で。台湾と中国のそういう複雑なつながりがいっぱいあるんですよ。今、台湾人の人はだいたい、北京語と台湾語で共通でしゃべっているんですよ。一つのことごとを説明するときに、流れとしたり、北京語、北京語、台湾語、台湾語、台湾語、北京語、北京語・・・（じゃあ、北京語だけ分かるっていう人は、もう）もう、今は2世、3世ですから（2世、3世は両方分る？）両方分るんです。親の場合は、全然分からない人も、まだいっぱいいます。でも、言葉は、台湾語をしゃべらないと、何て言うの、生きていけないような感じで。社会に出ては。（1997年8月）

### 例22 依をつける・中国福建省からの留学生（要約）

自分は、家庭や友人からは、依Wとよばれている。学校では、普通話で、北京読みで本名を呼ばれる。家では、父親を、依爸（イバー）、母親は、依媽（イマー）という。台湾なら、阿母（アムー）となるはずである。家庭によっては、兄のことを、依哥（イコ）、弟のことを依弟（イデー）と呼ぶ。友だちの親を、依伯と言ったりする。学校の先生は、例えば劉先生だったら、老劉、劉老師と言う。逆に、年下の相手なら、少劉といった愛称がある。しかし、会社の上司などには、劉部長、といった、肩書きをつけるのが普通である。（1997年5月）

### 例23 阿を付けるかセカンドネームで呼ぶ・香港人

（中国語で友だちを呼ぶときは、友だちをファーストネームで呼びますか。あなたの場合だとKWのように）ええ、ファーストネームのKWか、ウィンとよびます。（KWかDですか）いえ、ウィンです。（ああ、ウィン、最後の名前で）ラストネームでなく、セカンドです。（セカンドネームで・・・）実質的に[KWとWは]同じです。（ウィンとはいいますが、親しいときですか）んー、あー、ときどき。（親しいときだけ）いいえ。（どんな人もウィンと言いますか）ええ。私は、そのよばれ方は好きではない。ほんの一



部の人しかこうは呼びません。ほんの少数です。英語をうまく話せない人とか。(中略)(たとえば、一部の人は、阿とか依をつかいますが・・) ええ、ええ。いつも、こう言います。例えば、私の友人は、これを使います。彼は、英語名を持っていないんです。(名簿を見ながら) この人[S・HWさん]は、英語名を持っていないので、人は、ただWoといいます。あるいは、阿和(A Woアウオ)と言います。(人が英語名がないとき、Woをあたかも英語名のように使うんですか) ええ、例えば、T・KFさんは、A Fai か Fai とよびます。(家の中で、依か阿を使いますか。阿Wのように。ある人は、阿和とか依和と呼ぶと聞いていますが) 依は、知りません。これは使いません。阿は使います。(今までに使ったことは) あります。普通は、単にWoや、単にFaiのように呼びません。A WoとかA Faiのように言います。(あなたと、友人は、彼を阿和アウオとよびますか) ええ。(あなたのお母さんはあなたを阿で呼びますか) いえ。KWです。あるいは[親の出身地の]上海音で。(だれも言いませんか) うちの家族では、ありません。でも、別の家族ではあるでしょう。(これは、古い中国の習慣ですか。台湾人や、福建人が使うようですが) 阿は普通です。(おたくでは使わないけど、他の家族では) あ、私の家族は、いとこを呼ぶときにこれを使いました。阿佳(A Kaiアガイ)と言います。(これがセカンドネームですか) ええ。(おもしろいですね) でも、ルールはありません。小さい頃、ガイガイと呼んでいました。今は、アガイといっています。(原文英語および筆談)

#### 例24 エンを付ける・ベトナムからの留学生C・HTさん(要約)

(グエン・バンドンは、ドンとよばれるが、CさんはTとよばれるか) Tは、女性をあらわす言葉です。自分の場合は、Tとはよばれず、Hとよばれます。グエン・バンドンのバンは男性をしめします。(アを付けて言うか) 男性はアをつけて、ア・ドンなどという。女性は、エンをつけて、エン・ハイなどとよぶ。最近では、名前の付け方がきれいになってきたので、2語の名前で呼びかけることも多いです。(1997年8月)

このように、ア、イ、エンというのは、東アジアにおける呼びかけ語として、一般的であったと見ることが出来る。

また、男性、女性を表す言葉、日本では、郎、太、男、子、美などが、ベトナムにおいても一般的であったことは、文化的な古層の共通性を感じさせる。

#### 資料5 字(あざな)

島村によると、成年に達すると、父の命名した本名を尊んで、これと別に、自身で字をつくり、正式の文書以外の記名に字を用いることが多い。

字は、自由に変えることが出来るので、生涯に2つ以上を持つ人もいる。教師、親、などをのぞく、同輩以下の一般の人々は、彼を呼ぶときは、本名を避け、他称の名としての字を用いなければ、礼を失することになる。

島村の例によると

1) 李鴻章は、姓は李、名は鴻章、字は少荃または漸甫と称し、儀叟と号す。(清末の政治家、下関条約の主席全権)

2) 孫文は、姓は孫、名は文、字を逸仙または載之と称し、中山と号す。広東香山の人なり。(辛亥革命の指導者、国父)

井戸田によると、日本でも、人生の折節、名を改めてきた。複名の習慣があり、改名の自由があった。

井戸田の例によると、

1) 徳川家康の幼名は、竹千代であり、元服して、二郎三郎元信(通称・実名)、蔵人元康(通称・実名)、家康と名乗った。実名を敬遠する習俗から、普段は、通称の二郎三郎、蔵人が用いられた。

2) 同志社大学創始者、新島襄は、幼名を七五三太(しめた)といった。これは、女の子ばかりのところへ、男子が生まれたので、父親がシメタと言ったのが幼名になったという。

3) 大石内蔵助良雄は、通称である内蔵助と、実名の良雄を合わせ持っていた。

4) 村田良庵が、村田蔵六、大村益次郎と、名だけでなく苗字すら変えた。

5) 大久保利通は、一般には、大久保一蔵と、苗字・通称で名乗っていた。

6) 乃木希典の父は、乃木十郎源希次(苗字・通称・氏・実名)といった順番で名乗った。一般には、乃木十郎と、苗字・通称で名乗っていた。

7) 公家の場合は、苗字(公称)は公式には用いず、三条実美は、藤原朝臣実美のように氏・姓(かばね)・実名で称した。

田中の例によると、

1) 片山潜は、生まれたときは、管太郎であったが、38才で、天然痘にかかったとき、潜(ひそむ)に取り替えた。のちに音読みが通称となった。

以上のように、かつて東アジアでは井戸田のいう「タテの複名習俗」、つまり、人生の節目に名を改める習慣と、「ヨコの複名習俗」、つまり、実名と合わせて通称を名乗る習慣があったのである。

#### 資料6 名前の一本化

歴史的には、徴税と徴兵の必要から、名前の固定化、一本化の流れがあった。明治3年には、在

官者は、苗字実名で表記すべきと布告され、明治4年には、公文書では、苗字実名を用いるべきとされた。

「苗字名並屋号とも猥りに為相改候ては諸般取調方等に差支不都合不少候間御布告有之度」との大蔵省稟議をうけ、1872年5月7日(明治5年)、太政官布告により、「従来通称名乗両様用候来候輩自今一名たるべき事」いわゆる「複名禁止令」が出され、同8月24日の太政官布告で、「自今苗字名並屋号共改称不相成候事」いわゆる「改名禁止令」が出された。このあと、一定程度、俗名を認める形に落ちつくが、基本的には、名前は一つとなった。明治5年の時点で、西郷吉之助隆盛は、実名を選び、西郷隆盛とし、江藤新平胤雄は、通称を選び、江藤新平とした。

## 12 字(あざな)の心理的意味

筆者の私見では、俗名の使用、あるいは名前の変容(幼名、学名、字)は、心理学的にも意味があり、人間の人格的な成長にも関わっていたと思われる。東アジアでは、俗名の使用と、幼名、学名、字という名前の変容が特徴的であったと見る事が出来る。それが、この100年の間に失われてしまったといえよう。

それを補う意味で、ペンネーム、ラジオネーム、ニックネーム、英語名を持つことなどは、実名を使わないという実名守秘の意味(現在では、プライバシーを守るといふ意味となろう)とともに、自分の別の可能性を開かせるという心理的な意味があると考えられる。

別名を持つことの他に、関係名で人を呼ぶことも、類似した心理的意味あいがある。無意識的に、人々は、相手を固定的な名前で呼ぶことを避け、変容可能な関係名で呼ぶ。たとえば、課長、部長、といった名前や、お母さん、お兄さんといった関係名は、実名守秘もできる上に、一生の中で役割が交代し、変容する。

### 例25 字と幼名・台湾人留学生

(字ってあるでしょ。孫文なら逸仙とか) ええ。(こういう言い方は残っていますか) 全然ない。作家、作者?(ペンネームみたい・・) ペンネームみたいに。自分の名前を使わずにかっこつけてというやつがある。普段の人間は(ほとんどない)あと書道家とか。わざわざ昔の人のまねを使って。今はない。(じゃあ、本名は一つ) はい。(たとえば、幼名とか俗名) はい、あります。これはあります。(幼名は似ている言葉ですか、特別にあるの?) 幼名はつまり、小さいときに、お母さん、親が呼ぶ名前は幼名。俗

名は、友だちから。わざとなんか冗談ばく。顔が猿に似ているとか豚みたいとかで。幼名は、お母さんが。(その場合、自分の本名と関係するようなYYとか) YYあった。今でもお父さん、お母さんはYYという。(例えばこういう人[梁朝偉]だったら) ウィウィとかシャオウィとかアウィとか。[自分の場合は] 阿Yでも。(幼名に近いんですね。阿をつけているのは。全然違う幼名をよぶ人は居ますか) あると思います。でも、みんなじゃない。(戸籍とかに登録しないで、幼名を自分で付けていることがあると) はいはい。(戸籍するのは一つなわけね) 改名でもいいんですけど、ちゃんと理由言わないと。でも、改名できることはできる。(原文日本語)

筆者は、香港の英語名が、多くの場合、大学生ごろから、自分から用いられるということに、字の意味あいを感じとっていた。これを、香港人につけてみた。

### 例26 英語名と字・香港人

(私は、幼名や字についても知りたいんです。例えば、子どもの時は、何か別の名前で、大人になると、ある人は、字を持ちますか) 昔です。今は知りません。本の中では見ます。誰かが持っているか知りません。(孫文は例えば) 逸仙ですね。(私は、英語名がこれみたいだと思ったんですが、どうですか) そうです。たぶん。(大人になっての、社会的な名前ですね) そうです。(原文英語及び筆談)

このように、筆者の英語名の意味あいに関する仮説は、香港人自らが、感じていることでもあったのである。英語名は、字に近い意味あいを持っている。自分で大人になってから付ける名前、という意味では、彼の世代では字は英語名に相当する。しかし、最近のように、出生時から英語名を付ける傾向が出て来ると、幼児名に意味あいは変化するかもしれない。決して一般化は出来ないものである。また、字が年下から呼ばれるとすると、同輩から呼ばれる英語名とは意味あいが異なることは言うまでもない。あくまでも、心理的な意味あいである。

## V 文化混合

### 13 名前の文脈

鈴木均(1994)は、イラン人の名前を分類し、ペルシャ系とイスラム系の流れを指摘した。名前にも、いくつかの意味の文脈がある。1979年の革命を期に、約1割が、イスラムの宗教名に改名したという。

先に挙げたように、日本では実名と通称を合わせて名乗る習慣があったが、井戸田によると、通称は現代の名前にまで影響し、太郎のような、兄

弟の順をしめす排行系、吉之助の助、介、輔、亮などの官名、そして、実名系の流れがある。

この他、現代日本のタレント名に、名前だけの人が一定数いること、英語名を用いる人がいることなども、興味深い。

#### 14 夫婦別姓

近年、夫婦別姓の主張がなされるようになってきた。日本では、これらに関して、歴史的変遷があることが知られている。歴史的に見て、現在の夫婦同姓が、どのような経緯でできあがったのであろうか。「明治民法はじめにありき」といった論調が多いが、それ以前からの文脈は不可欠である。

##### 資料7 夫婦別姓の歴史

1870年8（明治3年）9月、「自今平民苗氏被差許候事」という太政官布告いわゆる「平民苗字許容令」が、1975年（明治8年）2月いわゆる「平民苗字強制令」が出される。柳田国男の「名字の話」など、当時の騒動を記した書物は多い。井戸田によると、それ以前に公的に苗字を名乗れた家は、全国民の6%にすぎなかったが、私称していた家、屋号を持っていた家も多くあった。

近代的戸籍法は、1872年（明治5年）の戸籍法実施によるが、この壬申戸籍では、家の概念は入っていたが、結婚改姓の制度は存在しなかった。1876年（明治9年）の太政官指令は、「婦女他家に嫁するも仍ほ所生の氏を用ふべきこと但夫の家を相続したる上は夫家の氏を称すべし」としているが、1888年に令達を見合わせている。

石原によると、それまでは、武士の妻は、多数の妻たちの間での身分の高低を表すために、実家の姓を名乗っていた。しかし、一夫一婦制で、ことさらそれを示す必要もなくなり、夫婦別姓を用いる必要性のない状況となった。庶民レベルでは、夫の姓に入ることが一般化した。そして、政府は、もともとの別姓を前提としていたため、しばしば、県から政府に、伺いがたてられた。「政府は、別姓を指導しているが、実状は同姓になっている。どうするのか」という伺いが多数みられた。

明治8年11月、石川県が「妻は生家の氏を称すべきか。夫の氏を称するのが穏当と考えられるが、右は先例これなきに付き決しかねる」として、伺いをたてたが、内務省は「初生の氏を用うべし」と訓令を出した（P131）。その後、高知県、長野県、山口県が、同様の伺いをたてたのに対し、い

ずれも、生家の生を記載すべしと訓令している。

明治23年から31年の民法導入に際しての論争では、西欧的な価値観と、家の価値観とが激突したとされる。結局、明治民法では、夫の氏に妻が入ることと規定された。ここで、初めて氏という概念が成立する。つまり、夫の氏に入るとするのは、単に西洋化の影響ではなく、明治初期の庶民の自然な考え方であった。

このように、法的にも「同氏」となったのは、1898年（明治31年）の明治民法からである。法的には「同姓」ではなく、「同氏」である。明治憲法は、姓を規定せず、「戸主、及び家族は、その家の氏を称す」（746条）、「妻は、・・・夫の家に入る」（788条）とされている。当時の論争については、井戸田に委ねたい。

前田卓（1992）は、それまで東日本に多くおこなわれていた、姉相続の現象について考察している。明治中期には、長兄相続と姉相続の間に、文化間接触が起こったと考えられる。

戦後の民法では、「夫または妻の氏を称する」（750条）とされ、氏の概念はそのまま残ったが、家の概念は廃止された。アメリカで女性の別姓が多くなると、日本でも1980年代以降、夫婦別姓の主張がなされるようになった。これは、女性がアイデンティティの一貫性を求めはじめたという文脈である。

#### 15 異文化間結婚

##### 例27 国際結婚・在シンガポール日本人（要約）

自分は、シンガポール華人と結婚した際に、愛する人の姓を名乗りたいと考えた。日本では、改姓届けを出し、夫の姓としたが、シンガポールに着くと、パスポート名を本名とみなされた。パスポート名までは変えていなかったのに、ICには、旧姓しか出ないという。そこで、交渉をし、名前・実家の姓・ミセス・夫の姓名の順番に記載されることになった。私は、会社では、日本名で称している。子どもは、英語名と中国名を記載する欄があり、シンガポールで登録したが、日本では、日本名を登録した。日常的には、子どもを英語名で呼んでいる。国際結婚の会で聞くと、日本で届けを出していない人が多かった。彼女たちは、日本に帰れば、独身だという。（1997年3月）

異文化間の結婚では、一方が名前を変えるということがある。

##### 例28 名前と宗教を変える・シンガポール華人女性L・B Cさん（要約）

（結婚は誰とでもできるか）同じ姓の人とは、できない。法的に出来ないことはないが、ボーイフレンドが同姓と分

かると、気にする。(多くの人は、同じ民族背景の人と、結婚するが、多文化間結婚をどう思うか) 私の意見は、カップルがよければそれでいい。問題はない。ただ、マレーの人やインド系と結婚すると、我々日本人は、嫁入りだが、彼らは、結納の方向が逆になる。マレー系と結婚すると、私の名前(ファーストネームから)をマレーネームに変えなければならないし、また、宗教をムスリムに変えなければいけない。豚も食べられなくなる。(BCさんならば、どう変わるか) 名前をマレー風にシティー、ハヤティーなどとし、ピンティをつけ、最後に父の姓のたぶんしを付ける。(原文英語)

#### 例29 女性の名前と宗教・シンガポール華人男性

(別の方から聞いたんですが、中国人のシンガポリアンと、マレー人のシンガポリアンが結婚すると、中国人は名前を、ファーストネームまで変えなければいけない、イスラム教にならなければいけない) それは、いろいろなケースがあります。だいたい、マレー人は生まれつきのムスリムですね。何らかの理由で、マレー人はみんなムスリムと考えてしまうんですけど。私のまわりに、マレー人が中国人と結婚して、ムスリムを放棄する人居る。それは、キリスト教の教会の中に、少ないとは言えないけど。これは本当のことですね。ある教会が、そのようなことを週報に書きまして、載せた。止めてくださいといわれました。社会の圧力で。自慢することではありません(どういう人からの) 政府。僕の聞いた話ではね、シンガポールには、ミーターというところがあります。Ministry of Information とかね。そう言うこと発表することは遠慮してください。以前は、マレー人とムスリム、等しい。しかし、そうじゃない。チャイニーズの中でもムスリム居ますよ。それほど単純なものじゃない。(異民族同士の結婚は増えてきますか) 増えてます。チャイニーズとインディアンのほうが、多いような感じがします。(男女はどちらが多いですか) たぶん、チャイニーズの女性と、インド人の男性。(その場合、インド人も嫁取りになるんですか) どうなるかな。僕の高校の時代の先生は、インド人の名前になりますね。チャイニーズの顔して。(ファーストネームも変えます? それとも同じ名前) とのり弁護士会社のパター、経営者は、彼女は名前変えてないね。(ファーストネームは中国系で、ファミリーネームはインド系の?) 彼女は、仕事するときずっと以前の名前。変わってない。(夫婦別姓ですね) です。(中国系はみなさんそう?) いえ、自由に、法の上では決まってない。(どちらが多いですか、苗字を夫の方にする人と) 最近のやり方としては、男の場合は、自分の苗字に名、女の子は、旦那の名を前に持ってきて、自分の苗字、自分の名、自分の結婚したことを表す。(4文字で) どちらかというと、男は昔のまま。それも差別でしょうか。しかしそうした方がありがたいね。もしかしたら、誰かさんの奥さん追いかけたら。(1997年3月)

シンガポールでは、マレー系の男性は、複数の女性と結婚していることがある。結婚の形態は、現代においてもさまざまである。そこには、文化接触による葛藤がある。マレー系は、夫の姓を名乗らない。夫婦別姓の例である。

#### 例30 文化モデル・在シンガポール日本人女性

テレビで、日本のファミリードラマとか、どこにもそういう形態がないじゃないですか。アマさんがでてきたり。たとえば、ここだったら、マレーの人は、4人まで奥さんがいいとかありますよね。ムスリムは。法的に4人までいいんですけど。実際は少ないが。けど、そういう事って、何をどう考えてそうできるのか、わかんないでしょ、土台がないから私たちに。だから、その話だったりすると、職場のマレー人の女性にちらっと聞いたりして。どうしてそう言うことが出来るの、と聞くと、誰だかわからない人のところに浮気をするより、今日は2番目のあの人のところに行ってるなど分かった方がましじゃないと言う。第2婦人のところに今日は行ってるとか。それでもね、もちろんいやはいやよと、その子は言うんですけど。ムスリムの教えにしたって、昔は良かったけど、西洋の影響受けてきて、一対一の結婚生活とか、分かった以上、現代っ子の奥さんには許せないんですよ。(1997年3月)

このように、異文化間結婚においては、夫婦がどちらかの文化の名前を名乗ることは、重要なテーマであり、多くの場合、女性が変わるが、例27, 29のように多くは通称を名乗っている。筆者の知人で、マレー系の女性と結婚した男性は、イスラム教に入信し、イスラム名も持っている。彼も、普段は元の文化の姓名を名乗っている。宗教を変えること(離脱すること)は、エスニック・グループ間で大きな問題を引き起こす可能性があり、シンガポールの例29では、緊張関係がうかがわれる。また、複数の妻を持つ場合の例30は、名前をテーマとする本稿においては、やや異質であったかも知れない。しかし、この例は、異なった価値観がぶつかりあっている現状を示している。彼女たちの現状では、夫の姓を名乗るということが、マレー文化の中にもないかも知れない。しかし、すぐとなりにある英語系の文化の中には、「ミセス・夫の姓」という文化モデルがある。この事は、彼女たちに何らかの葛藤を与えていると考えられる。

#### 考察

##### 多文化混合

筆者は、本研究で、多文化が混合している地域に関心を持ち、香港、シンガポール、台湾の人々にインタビューを行い、名前についてのさまざま

な現象をふりかえった。筆者が多文化混合地域に関心を持つのは、日本自体、多文化が混合してきたという問題意識があるからである。異なった文化、価値観、ルールが混在するところに、なんらかの葛藤、軋轢が生まることがある。日本においては、日本の中の地域差の大きさもあり、それらの接触という側面もある。また、欧米文化の急速な流入という側面もある。これらの文化接触現象を、香港などの多文化混合地域は、典型的に指し示してくれていると考える。文化同士が接触するときに、名前、年号、象徴、習慣、価値観などが変容してゆく。ある時期は、自国の年号と、西暦を併存させることを選ぶかも知れない。ある時期は、独自の年号を創出するかも知れない。同じように、名前は、それ自体は個人的なものでありながらも、無意識的にエスニック・アイデンティティが関係している。また、ある場合は、国が名前についてある命令を出すこともある。

#### 名前の多様性

名前の構成には、国・文化によりさまざまな多様性があり、日本の現在の姓と名という感覚だけで対応すると、姓と名を間違えたり、姓と父の名を混同するなど、相手に対して失礼なことも多々ある。筆者は、姓のない文化、父の名を付ける文化、個人一代の姓を付ける文化について紹介した。そもそも、古代においては、姓のない文化であり、姓に対する価値観を相対化することは、意味のあることであろう。

姓名というものは、歴史的に多くの文脈を内包している。最初の姓の発生は、古代中国であり、古代ローマであった。姓の歴史をひもとくと、姓から氏（あるいは氏から名字）といったそれぞれの国における変遷が見られる。日本、東南アジアの一部で姓を大衆にまで一般化したのは、近代化による徴税、徴兵の制度のためであったといえよう。また、名前だけでは、同名が増えて、区別できないという現実的な問題のためである。欧州では、ナポレオンによる創氏によって姓名の連称は広まった。この流れが始まって、高々200年の歴史なのである。

#### 英語名、俗名の意味

東アジアには、英語名を用いる地域がある。筆者は、香港人、シンガポール人に、英語名についてインタビューを行った。香港、シンガポールでは、英語名を自分で付けて、高校生、大学生になってから名乗る例が多い。香港では、80%ほどが英語名を持っていると言われる。英語名は、明らかに西洋文化への同化を示しているが、その心

理的な意味は、さまざまである。筆者のインタビューによると、英語名は、使いやすいことのほかに、中国名では上下がつきやすいのに対して、対等な関係を保てることなどの意味を持つ。また、自分の本名を知らせる必要がないこと（別の世界をもてること）、さらに、ある面では、近代化によって消失した、字（あざな）に似た、成人としての名前の変容の意味を持っていると思われた。また、これらの背景に、東アジアに普遍的であった、実名守秘の無意識的な文脈があることを示し、Aさんのお母さん、B課長、Cさんの御主人といった関係名も、この文脈で読みとることが出来ることを示した。

#### 姓とエスニシティ

筆者は、本論で、名前のさまざまな現象の、背景の意味の文脈をたどることを目的としている。多くの場合、姓はエスニシティや階級を何らかの形であらわしていることを示してきた。日本では、地名が姓の主体であるが、これは、字から発した名字が現在の主流の姓だからである。こうして、姓を見ることによって、どこの国の人かが分かることも多く、海外の飛行機事故の際には、乗客リストから日本人を判断することも出来る。ヒンズー文化圏では、姓からカーストが分かるとされる。これまで、さまざまな民族間関係、移民などによって、同化、改名の現象が起こっている。古くは、中国との関係において、また、最近ではアメリカ、日本などの半強制的な改名例を示したが、喜んで改名するというタイの例は、改名の意味が相対的であることを示している。

香港の元総督クリス・パットンが、彭定康・テンホンと称しているなどは、相手の文化を尊重するという姿勢としての現地姓の原型である。現在でも、アメリカの中国研究者が、中国名を名刺に印刷しているのを筆者は知っている。しかし、一時的に滞在する外国人における現地姓と、永住している人、或いは2世、3世における現地姓の意味することは異なっていると考えられる。

De Vos と Romanucci-Ross (1975) は、エスニック・アイデンティティについて考察している。彼は、「エスニック・アイデンティティは、自集団の文化や行動の何らかの側面を、その文化を象徴する物（エンブレム）としてとらえ、それを共有する者に対して、一体感を持ち、それによって自集団を他集団から区別しようとする感情である」とする。国民国家の枠組みの中における民族は、エスニシティとして定義され、この文脈では、出身国の言語や宗教の多くを失っていても、

その一部を共有し、主観的な帰属意識があって、同一化していれば成立しうる。

移住者、滞在者が、母国と頻繁に交流し、関係を保っている場合、現地姓を持っていたとしてもなんらエスニック・アイデンティティに関係しない。しかし、定住し、母国との関係が失われてくると、名前、儀式、基本的な単語などのみが残り、名前がエスニシティを象徴するエンブレムになる。このように、名前のもつ意味の文脈は、全く異なることになるのである。そして、エスニック・アイデンティティのシフトによって、名前の用い方もシフトすることを、平ほか(1995)は示している。日高(1997)は、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティの確立のために、6種類の名前の名づかい方を用いている。

#### 発音とエスニシティ

一部の文化では、外来発音を保存し(シンガポール、韓国、日本のカタカナ)、一部の文化では、その地の発音によって、同化して変容保存している(香港、中国、日本、韓国の漢字音)ことを、筆者は紹介し、インタビューで示してきた。漢字の音を、日本の音(厳密にいうと、多くは呉音、漢音であり、当時の外来音である)で表すことの意味について、いくつかの異なった流れを紹介した。つまり、多くの華人にみられるように、文字を中心に考え、発音にこだわらない立場、韓国人のように、音を中心に考え、音の保存を強く望む立場、シンガポールの英語文化のように出身地域の音を残しているものの、中国語を使うときは北京音に変える立場などである。音を自分の文化に変容させるという現象は、その言語の文化的な強さとも関係している。香港の広東文化は、外来音を、すべて広東読みに変容させるが、同時に、英語を用いていることで、人名、地名をすべて北京読みで保存する流れになっている複雑な現状がある。台湾では、新しい単語はすべて北京読みで理解され、保存される。つまり、逆説的であるが、香港よりも台湾の方が、とうに中国化していると言えるかもしれない。このように、発音の保存には、外来音保存、地域音による変容保存、中央音による変容保存の3種類があると考えられた。

#### 文化の原型と混合

最後に、夫婦別姓のもつ歴史的な流れをふりかえり、近代日本における夫婦同姓(夫の姓に入る現象)は、西洋に合わせるという意味あいの方で、庶民のレベルにおける一夫一婦制における感覚が大きな要因であったことを示した。歴史的には、夫の姓を名乗りたくても名乗れないという現象の方が主流であった。現代の夫婦別姓は、女性のアイデンティティ維持に関係するが、背景には、さまざまな心理的な要素が含まれている。これらの背景には、名前の固定化、一本化という近代社会の流れがある。井戸田は、古来東アジアでは、同時に多数の名前を持つヨコの複名習俗、成長とともに名前を変えてゆくタテの複名習俗があったとした。これらの固定化、一本化の文脈から、別姓の議論をとらえ直す必要を感じる。ただし、別姓の実状に関しては、インタビューを含めて、別の機会を待ちたい。本論では、いくつかの異文化間結婚の例を示すことによって、そこに日本の別姓論議と同じような名前の選択、宗教の選択の問題があることを見た。例30に示したように、心には「文化モデル」というものがある。我々は、自分の心にモデルがないものは、異文化として、なかなか適応することが出来ない。心の基層には、歴史の蓄積がある。例えば、野球の審判に関して、日本とアメリカに大きな違いがあることが指摘されている。審判の決定が強い力を持っているアメリカ文化と、審判は、まわりから物を言われて、決定を変えるという、相撲の「物言い」の文化モデルをもっている日本では、大きな違いがあり、なかなか一致することは出来ない。同じように、異文化間結婚は、お互いに文化のモデルが異なる者同士の結合である。たとえば、米谷ふみ子(1991)「過ぎ越しの祭」は、アメリカにわたった筆者が、ユダヤ人男性と結婚し、その間の感情の交流を描いたものである。

異なる文化が接するときの現象については、まだまだ研究されていないことが多い。

本稿では、さまざまな名前の現象の背景に異なる文化の接触、混合とその反応がみてとれることが明らかにされたと言えよう。

## 引用文献

- De Vos, G. & Romarucci-Ross, L. 1975 *Ethnic Identity—Cultural Continuity and Change*. Palo Alto, CA.: Mayfield.
- 福岡安則 1993 在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ 中公新書
- Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Culture* (Basic Books) ギャーツ『文化の解釈学 I II』吉田 禎吾, 柳川啓一, 中牧弘允, 板橋作美訳 (岩波現代選書, 1987)
- 日高正宏 1997 在日韓国・朝鮮人学生のアイデンティティ 日本心理臨床学会 第16回発表論文集 72-73
- 石原輝 1989 夫婦の絆は同姓から 現代のエスプリ 261 130-138
- 井戸田博史 1986 「家」に探る苗字となまえ 雄山閣
- 北山修 1993 自分と居場所 岩崎学術出版
- 姜信子 1990 ごく普通の在日韓国人 朝日文庫
- 姜信子 1993 私の越境レッスン 韓国編 朝日新聞社
- 米谷ふみ子 1985 越境しの祭 新潮社
- 前田卓 1992 女が家を継ぐとき 東北・北関東に見る女性の相続 関西大学出版部
- 松本脩作, 大岩川嫩編 1994 第三世界の姓名 人の名前と文化 明石書店
- 武藤芳照, 福島(太田)美穂, スポーッダービング UP 279号, 1996, 1月
- 武藤芳照 別姓と著作の問題 UP 288号, 1996, 10月
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 講談社新書
- 中根千枝 1972 適応の条件 講談社新書
- 中村俊哉 1997 アジア地域における企業内多文化接触の心理学的研究(シンガポール) 福岡発・アジア研究 報告 Vol. 6-No1 23-29, 財団法人アジア太平洋センター
- 王 泉根 林雅子訳 1995 中国姓氏考 第一書房
- 佐藤文明 1989 本名=戸籍名なんてとんでもない 現代のエスプリ261 P56-64
- 佐藤文明 1996 在日「外国人」読本 緑風出版
- 沢田ゆかり 1994 香港 植民地が生んだ多重言語社会の名称 松本, 大岩川編 第三世界の姓名 明石書店
- 司馬遼太郎, 上田正昭, 金達寿 1975 日本の渡来文化 中央公論社
- 島村修治 1971 外国人の姓名 ぎょうせい
- 島村修治 1977 世界の姓名 講談社
- 鈴木均 1994 イラン 地震罹災者のリストに見る名づけの変遷 松本ほか 第三世界の姓名 明石書店
- 孫大俊 1995 古代三国の姓氏について 法政考古学 323-337
- 平直樹, 川本ひとみ, 慎栄根, 中村俊哉 1995 在日朝鮮人青年に見る民族的アイデンティティの状況によるシフトについて 教育心理学研究 第43巻 第4号 380-391
- 竹村卓二ほか 1989 名づけ 季刊民族学, 新春19 84-90
- 竹村卓二 1986 日本民俗社会の形成と発展 山川出版
- 田中克彦 1996 名前と人間 岩波新書
- 吉田孝 1988 古代社会における「ウヂ」日本の社会史 第6巻, 岩波書店

## 謝 辞

インタビューに快く応じて下さり、貴重な情報、御示唆をいただきました方々に、心より御礼申し上げます。